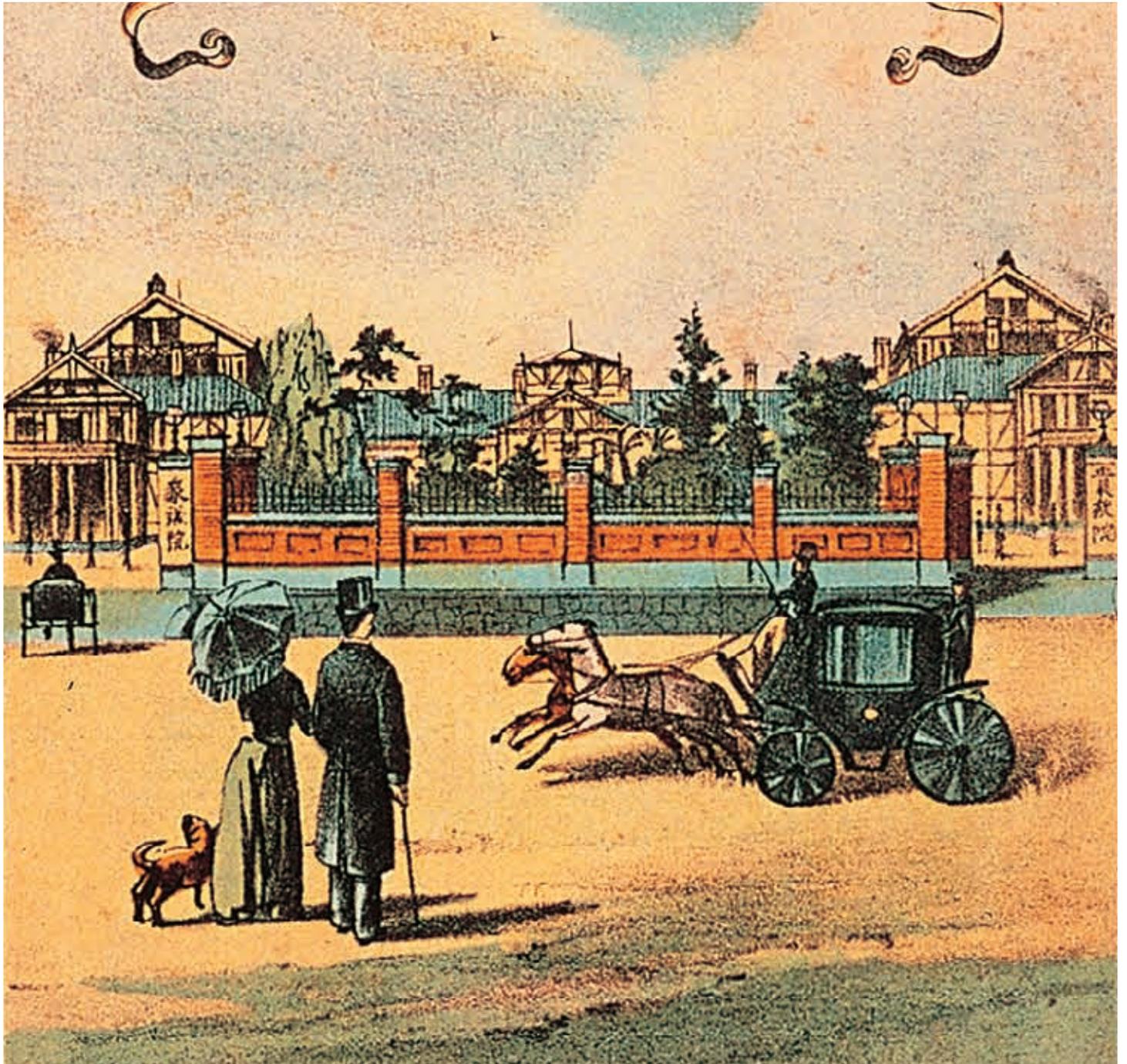


国立国会図書館



特集 議会開設120年

坂本龍馬 近江屋事件の現在

2010.11
No. 596

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
03(3506)3301(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

| | | | |
|--------|--|-----------|-----------------------------------|
| 開館時間 | 月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 | 即日複写受付 | 月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00 |
| | ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。 | 後日複写受付 | 月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30 |
| 資料請求時間 | 月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 | オンライン複写受付 | 月～金曜日 10:00～17:30 土曜日 10:00～15:30 |
| | ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室および古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。 | | |

■見学のお申込み／国立国会図書館 資料提供部 利用者サービス企画課 03(3581)2331 内線26111

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
利用案内 0774(98)1212(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

| | | | |
|---------|-------------------|-----------|-------------------|
| 開館時間 | 月～土曜日 10:00～18:00 | 即日複写受付 | 月～土曜日 10:00～17:00 |
| 資料請求時間 | 月～土曜日 10:00～17:15 | 後日複写受付 | 月～土曜日 10:00～17:45 |
| セルフ複写受付 | 月～土曜日 10:00～17:30 | オンライン複写受付 | 月～土曜日 10:00～17:00 |

■見学のお申込み／国立国会図書館関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声・FAXサービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

| | | | |
|---------------|------------------|---|--------------------------|
| 開館時間 | 火～日曜日 9:30～17:00 | ※1階子どものへや、世界を知るへやおよび3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。 | |
| 第一・第二資料室の利用時間 | 閲覧時間 | 火～土曜日 9:30～17:00 | 資料請求時間 火～土曜日 9:30～16:30 |
| 複写サービス時間 | 即日複写受付 | 火～日曜日 10:00～16:00 | 後日複写受付 火～日曜日 10:00～16:30 |
| | 複写製品引渡し | 火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30 | |

■見学のお申込み／国立国会図書館国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

- 02 世界転覆奇談 せかいのひっくりかえるめずらしきはなし
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 04 特集 議会開設120年
- 04 120年の蓄積と重み
議会開設百二十年記念議会政治展示会開催に際して
- 14 電子展示会「史料にみる日本の近代」
開国から戦後政治までの軌跡
- 18 帝国議会の歴史をひもとく 帝国議会会議録検索システム
- 26 坂本龍馬 近江屋事件の現在

22 館内スコープ
国会と歩んで60年 一月刊誌『レファレンス』一

23 本屋にない本
○『絵葉書のなかの土佐 移ろいゆく時代の記憶
展示解説図録』
○『国宝土偶展 文化庁海外展 大英博物館帰国記念』
○『ふりかけの世界』

37 NDL NEWS
○フランス共和国上院議員団の訪問
○国際政策セミナー「中国の対外戦略と日中関係」

38 お知らせ
○年末年始のご利用について
○関西館企画展示「明治立憲制へのあゆみ
—名士の筆跡をたどって—」
○「本の万華鏡」第5回「ようこそ、空へ
—日本人の初飛行から世界一周まで—」
○新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

世界転覆奇談 せかいのひっくりかえるめずらしきはなし

藤元 直樹

今から130年ほど昔の明治14（1881）年、400年前のイタリヤで世界の滅亡を予言した者があったというニュースが雑報として日本に伝わってくる。1881年11月15日から15日間、日替わりで次々と天変地異が襲いかかって滅亡に至るといふ予言は摺物に仕立てられて、世の話題をさらう。これが「せかいのひっくりかえるめずらしきはなし」と訓じられる「世界転覆奇談」騒ぎである。

1925年、宮武外骨とも交流のあった明治文化史研究家井上和雄は、その母の体験談を、「数多の絵草紙が市内到る所の絵草紙店を賑はし、日々非常な売れ行きであった、併し、それがために自殺者が激増したとかで、其筋の取締が矢釜しくなり、且つ其の「妄説」であるといふ事も明かになつて、さしも大流行の絵草紙が遂に姿を見せなくなった」と書き残している*。

さて、これがどのぐらい出版されたか、わかるかぎり表に示そう。まず大阪で一枚物①、続いて京都で②、③が出た後、東京に舞台を移し一枚物から小冊子④～⑯まで、計19点を数える。

これ以外にも、二枚続「世界転覆奇聞」と一枚物「世界転覆珍談」（野本總七）を井上は見ているといい、関連出版物の総点数はさらに大きなものとなるかもしれない。

ともかく、確かに大変な騒ぎであったわけである。

当時の新聞記事から経緯を再構成すると、この騒ぎは横浜のフランス語新聞*L'Echo du Japon*が1881年8月13日に掲載した埋め草記事（La fin du monde）を、『東京日日新聞』が26日に翻訳掲載する。それを転載した9月2日の『大坂日報』の記事が話題となり、同地の絵草紙屋綿喜が摺物に仕立てて、騒ぎが拡大、東京では9月21日に出版の届が

出された平野伝吉版をきっかけに類似出版が相次いだということになる。なお、この平野版が参照したのは、『郵便報知新聞』に出た8月25、26日の記事のようだ。

口火を切った平野伝吉が警察の取り調べを受け、「世界転覆奇談と唱ふる絵紙を揚言読売者有之右ハ不都合に付巡查に於て見認次第に差止可く此旨」（10月9日『いろは新聞』）の通達が出され、この騒ぎは沈静化していく。

文面をみれば、これらの出版物はいずれも「妄説」を諷刺するという体裁をとっていた。それにもかかわらず、破滅を確信し自暴自棄となる者が続出する原因が「絵草紙」に求められたことは、本来のテキストから離れた内容が口上として語られ、噂として人々の間を駆けめぐっていたことを示す。この事件は図らずも、摺物が視覚に限定されたメディアではなく、そこから離れた音声データを重ねたマルチメディア商品であったことを教えてくれるのである。

（ふじもと なおき 総務部情報システム課）

*「世界転覆奇談」『新旧時代』1(7) 1925.9 pp. 49-52 <複製版請求記号 Z8-956>

松井鉤夫著『変地奇論：世界流言』

東京：松寿堂，明治14（1881年）10月．16p；19cm

中組源太郎編『世界転覆奇談』

東京：中組源太郎，明治14（1881年）10月．12丁；18cm

小林栄成編『世界転覆奇談：リンコオンシヤー伝』

東京：専売堂，明治14（1881年）10月．12丁；18cm

村上豊次郎編・画『世界不転覆伝法』

東京：村上豊次郎，明治14（1881年）10月．5丁；19cm

※すべて「近代デジタルライブラリー」（<http://kindai.ndl.go.jp>）でご覧になれます。



写真1



写真2



写真3



写真5



写真4



写真6



写真7

写真1 『世界転覆奇談』(中組源太郎)

写真2 『世界転覆奇談』(専売堂)中組源太郎版とほぼ同一内容。

写真3 『変地奇論』(松寿堂)世界滅亡の予言を批判する書。

写真4 『世界転覆奇談』(専売堂)海水の逆流(1日目)大洪水(2日目)河魚の滅亡(3日目)海洋生物の滅亡(4日目)鳥類の滅亡(5日目)…大地震を経て13日目には星が雨の如く降ってくるという(11(ママ)丁表)。

写真5 『世界不転覆伝法』(村上豊次郎)頓智で天変地異に対処し、予言を笑い飛ばす書。

写真6 『世界不転覆伝法』から星が降ってきたら土に埋めて「埋星」に。お茶漬けにすれば良いという([5]丁表)。

写真7 『世界転覆奇談』(専売堂)からイギリスでは83歳の老人が退避用の気球を用意しているという…(3丁裏)。

表 『世界転覆奇談』関連出版物(カッコ内は所蔵機関)

- | | |
|---|--|
| ① 一枚物『世界の転覆といふ妄説』大阪：綿喜(未見) | ⑩ 冊子『変地奇論』松寿堂(当館蔵・写真3) |
| ② 『新聞画抄世界の妄説』京都(未見) | ⑪ 冊子『世界転覆奇談』中組源太郎(当館蔵・写真1) |
| ③ 小冊子『世界転覆の感を解』京都：壇上強平 | ⑫ 冊子『世界転覆奇談』専売堂(当館蔵・写真2) |
| ④ 一枚物『世界転覆奇談』平野伝吉(早稲田大学図書館) | ⑬ 一枚物『世界変動予防之伝』三河屋八三郎(未見) |
| ⑤ 一枚物『世界震動奇聞』長谷川作治郎(東京大学史料編纂所) | ⑭ 冊子『世界不転覆伝法』村上豊次郎(当館蔵・写真5) |
| ⑥ 『大評判世界転覆疑論』西條弥助(未見) | ⑮ 一枚物『世界天福喜談』大坂屋(未見) |
| ⑦ 一枚物『世界転覆奇談』加藤捨吉 (東京大学明治新聞雑誌文庫、山形大学図書館) | ⑯ 二枚続『世界転覆奇談』石川竹治郎(東京大学明治新聞雑誌文庫、東京大学情報学環 [右葉のみ]) |
| ⑧ 二枚続『世界転覆奇談』阪倉福太郎(東京大学情報学環) | ⑰ 二枚続『世界転覆無事翻訳』酒井峯次郎(国立歴史民俗博物館) |
| ⑨ 一枚物『明治十四年十一月十五日ヨリ世界転覆噺』松井栄吉 (東京大学総合図書館、日本銀行) | ⑱ 三枚続の一部か? Masseze [仮題](米国議会図書館) |
| | ⑲ 一枚物『世界不転覆論』長谷川徳三郎(未見) |

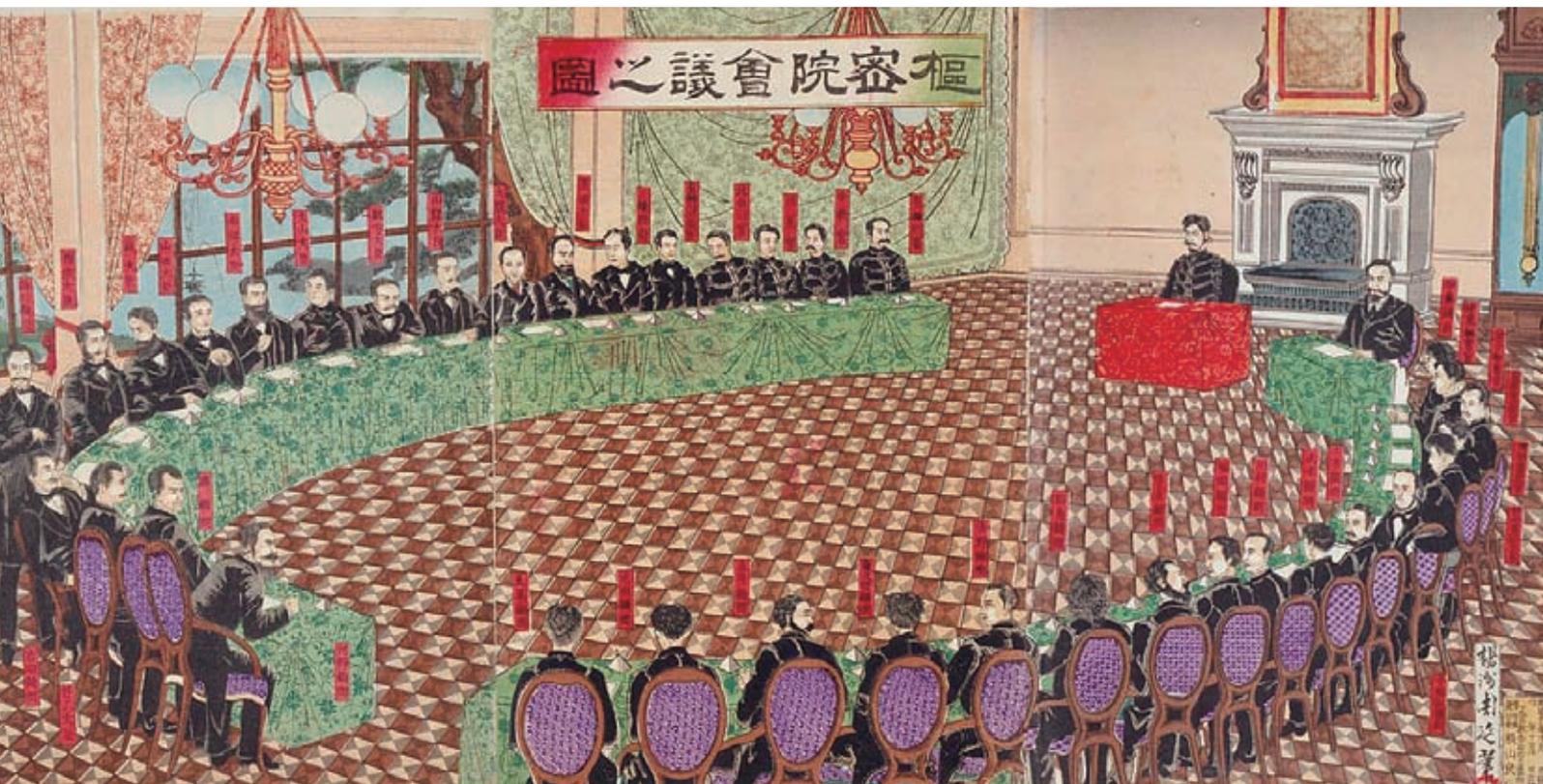


120年の蓄積と重み

議会開設百二十年記念議会政治展示会開催に際して

季武 嘉也 (創価大学文学部教授、国立国会図書館客員調査員)

国立国会図書館は、平成22年12月1日から同月10日まで、議会開設百二十年記念議会政治展示会を憲政記念館で開催する。ここでは、展示する資料を簡単にご紹介する。

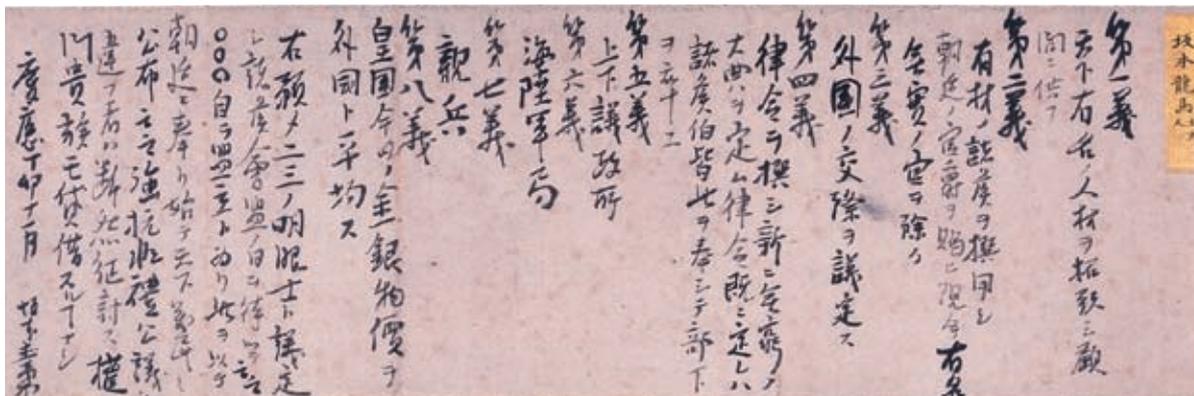
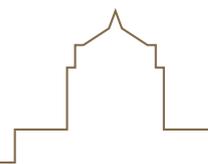


枢密院會議之圖 楊州周延画 明治21年10月 <請求記号 憲政資料室収集文書 1133>

1 あわただしき120年

文久2(1862)年イギリス議会を初めて見た福沢諭吉が、しのぎを削って言い争いながらも、後に同じテーブルで酒を飲み交わす与野党議員の姿を見て「訳がわからない」と不思議だったという話は有名だが、それから28年後の明治23(1890)年には日本でも帝国議会が誕生した。今からみれば悠長に感じられる28年間だが、おそらく当時の人々にとってはさまざまなアイデアが浮かんで

は消え、消えては浮かぶあわただしさの連続の末にやっと漕ぎ着いた制度であったと思われる。展示会の第1部は、このようなあわただしさにもかかわらず、考え抜かれかつ創造性に満ちあふれた史料群によって構成されている。ただし、こうしてできあがった議会制度は、考え抜かれたものではあっても、完成したものではなかった。制度も手続きも、議会を開設してから一步一步手探りで始めなければならなかったのである。



新政府綱領八策 慶応3年11月 <請求記号 石田英吉関係文書 1>

さて議会開設から34年、試行錯誤を経て大正13(1924)年に護憲三派内閣が成立、昭和3(1928)年の第1回普通選挙の頃には、二大政党によって新時代が築かれるだろうと予測する者も多かった。しかし、御存じのようにその期待に反し、わずか8年間で終止符を打つ。原因はさまざまであろうが、米・ソ連・中国の台頭という新たな国際関係や経済の世界的激動の中で、多くの国民を納得させるだけの政策を打ち出せなかったことが大きかった。戦後、占領軍の間接統治下で政党政治は復活、昭和30(1955)年には自民党が結成され、社会党も再び統一されていわゆる55年体制となり、これで二大政党時代になるのではと考える者もいたが、結局は冷戦構造の中で自民党長期政権に傾いていった。展示会の第2部は、昭和期の戦争を挟む形で存在した、二大政党制に近づいたこの二つの時代を取り上げ、それが国際社会などに翻弄されつつ、変貌していく姿を示す史料群で構

成されている。

120年間、さらにその前史を加えれば約150年間を駆けてきた日本の議会政治は、多くのことを経験した。展示会から、その一端を思い起こしていただければ幸いである。

2 立憲政体論の登場

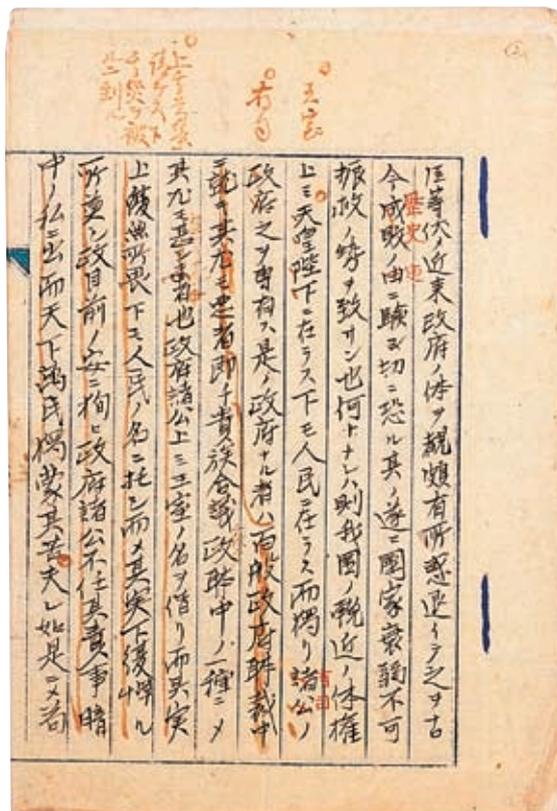
「第1部 議会政治への道」は日本近代史の幕開けを告げる嘉永6(1853)年のペリー来航から、帝国議会開設までを対象とした。その「第1章 幕末・明治初期の政体構想」冒頭では、いまや幕末のスーパースターとなった坂本龍馬直筆の書を見ていただくことになる。龍馬や後藤象二郎らが憲法制定・議会開設を構想したことで有名な「船中八策」の原本が確認されていない現在、「船中八策」をもとに龍馬が執筆した「新政府綱領八策」(上写真)は、議会政治の源流として大きな価値をもつだろう。なお、〇〇〇と伏せ字となっている



部分に関しては山内容堂説、徳川慶喜説などあり、龍馬の構想を知る上で重要であるが、いまも通説は定まっていないようである。これとあわせて、当時の海援隊の活動を示す陸奥宗光宛書翰¹も展示した。つづいて幕末動乱の開始となったペリー来航にかかわる史料のうち、フィルモア大統領国書²と日米和親条約に関する史料³を掲げた。

つぎに、幕末期の政体構想に関する史料を展示した。その内容は幅広いが、会議を開くという点では幕府も諸藩の側もおおむね一致しており、当時共通した意識であった。この背景には、幕府だけでなく日本全国の藩から有志や有能な者が集ってより良い知恵を出し合い、その上で全員が協力できるような政治体制を構築しようという発想があった。ただし、ここには議会政治という観念はあっても、党派対立を前提とした政党政治という考えは、前述の福沢のように未だなかったようである。

つづいて、初期の明治政府内部から起こった立憲構想にかかわる史料群を展示した。新政府指導者にしても、たとえば宮島誠一郎が「国憲編纂起原」⁴で「民権自由ノ主義ヨリ共和政体ヲ主張」するグループから「封建守旧ノ主義ヨリ君主専裁ヲ主張」するグループまで存在し、「此際政体一定セサレハ」いかなる事態となるかわからないと述べているように、憲法制定・議会開設論は共有



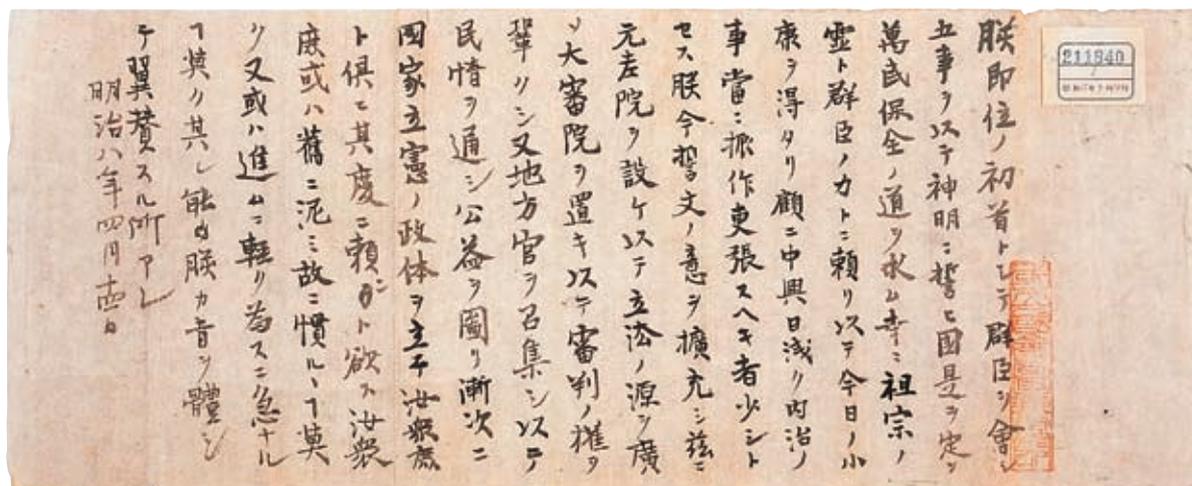
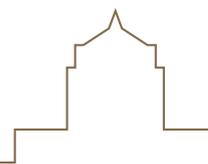
民撰議院設立建白書草稿 明治7年1月
 <請求記号 古沢滋関係文書 13>

された考えではあったが、根強い反対論もあり、このように分裂し緊迫した事態の下で、もしそれに失敗すれば政府にとって大きなダメージとなる可能性があり、容易に実行することもできなかった。そこで政府は、岩倉使節団など海外調査をして、慎重にことを運んでいこうとしたことがこれら史料からわかっていく。

しかし、明治6(1873)年、板垣退助らが愛国

1 坂本龍馬書翰 陸奥宗光宛 慶応3(1867)年11月7日
 <請求記号 陸奥宗光関係文書 51-13>
 2 「合衆国書翰和解」 嘉永6(1853)年

<請求記号 三条家文書 2-22>
 3 「日米和親条約」 安政元(1854)年12月
 <請求記号 三条家文書 3-49>



漸次立憲政体樹立の詔 明治8年4月14日 <請求記号 伊藤博文関係文書 書類の部 47>

公党を創立し民撰議院設立建白書（前頁写真）を提出したため、事態は急変した。すなわち、明治政府の薩長閥と自由民権派が、疑似的に二大党派を形成し対峙する形となったのである。その両派の間で生まれた妥協が、明治8年の大阪会議であった。明治政府代表大久保利通、民権派代表板垣の間を木戸孝允が奔走し、元老院・大審院・地方官会議を設置し漸次に立憲政体を樹立するという詔が発せられることになったのである。これに関する史料として、「政府改革図案」⁵などを展示した。

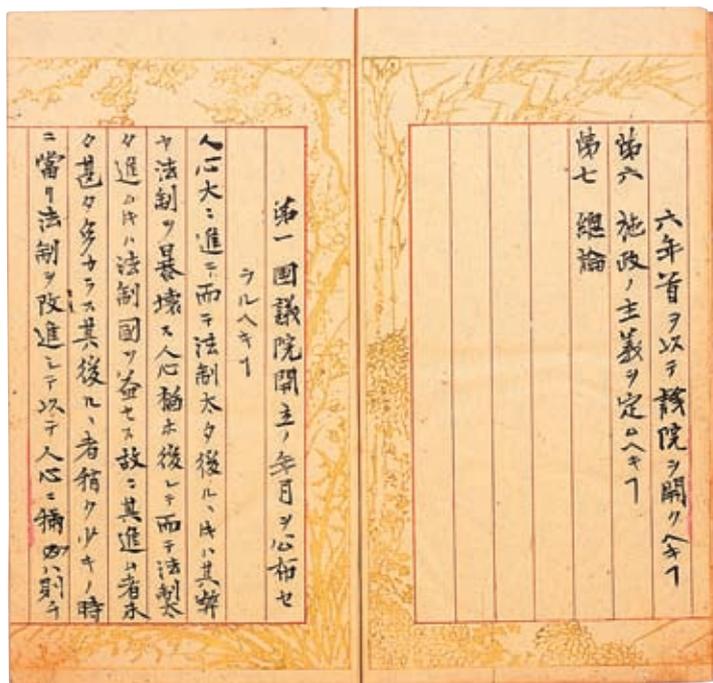
3 立憲政体をめぐる議論の噴出

展示会「第2章 立憲政体樹立を目指して」は、この詔書草案(上写真)から始まる。これを拠り所

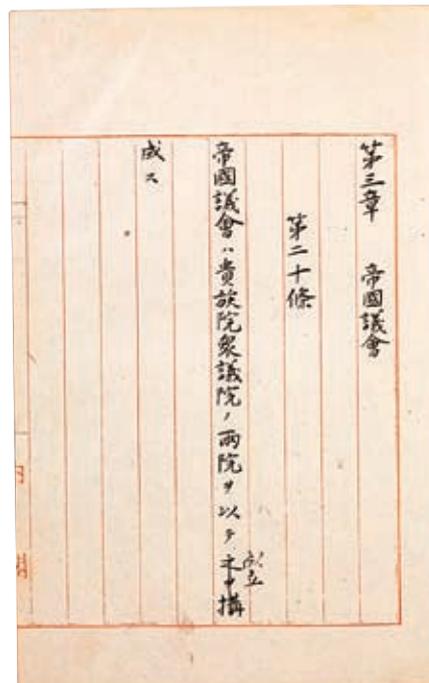
にして、以降は政府内部および民権派から多くの憲法論・国会論が提出された。結局は明治14(1881)年になって、10年後に議院を開設すること、欽定憲法をつくることを明治政府は公約する（明治14年の政変）のだが、本章の史料は政変に至るまでの諸案や政変の過程を示す史料で構成されている。まず、設置されてわずか1年半の元老院で起草された憲法草案「日本国憲按」⁶を掲げた。すでに各国の憲法が翻訳されており、それらを参考にしたものであったが、西南戦争など多事であったため、あまり問題にされなかったようである。西南戦争が終わると、民権派の活動は急速に拡大した。特に、明治13(1880)年には全国で議院開設要求が高まり、同時に私擬憲法作成も盛んと

4 明治16(1883)年
<請求記号 宮島誠一郎関係文書 1014>
5 明治8(1875)年1~2月頃

<請求記号 古沢滋関係文書 25>
6 明治9(1876)年10月
<請求記号 陸奥宗光関係文書 61-3>



大隈重信の上奏文(写) 明治14年3月
〈請求記号 伊藤博文関係文書 書類の部 502〉



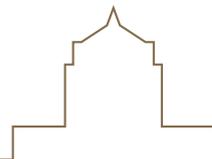
夏島草案 明治20年8月
〈請求記号 伊東巳代治関係文書 8〉

なった。展示した史料のうち「東洋大日本国々憲案」⁷は、民権結社の中でも代表的な立志社の植木枝盛のものである。政府もこれらの動きを受けて憲法制定に積極的に踏み出し、まずは各参議に意見を建議するよう申しつけた。こうしてなされた建議の中で大きな衝撃を与えたのが、憲法即時

公布、2年後の議会開設を骨子とする明治14年3月に提出された大隈重信の建議(上左写真)であった。この急進案に対し、政府部内の他の有力者からは強硬な反対論が続出した。特に岩倉具視は、対案として井上毅に「憲法中綱領之義」⁸の起草を命じ、これが後に政府の基本方針となってい

7 明治14(1881)年8月 〈請求記号 牧野伸顯関係文書 書類の部 89〉
 8 明治14年6月 〈請求記号 伊藤博文関係文書 書類の部 229〉
 9 明治14年、北海道などの開発のために設置された開拓使の長官黒田清隆が施設等を民間に安価で払い下げようとし、大隈をはじめ自由民権派が反発した。これに対し、伊藤博文などの薩長有力者は明治14年の政変で大隈を追放し、払下げを取り消した。
 10 「自由党盟約」明治14年10月 〈請求記号 樺山資紀関係文書 書類の部 54〉、「留客斎日記」明治15(1882)年

4月 〈請求記号 小野梓関係文書 28〉
 11 「立憲政体調査につき特派理事歐洲派遣の勅書」明治15年3月3日 〈請求記号 伊藤博文関係文書 書類の部 209〉、伊藤博文書翰 松方正義宛 明治15年5月24日 〈請求記号 伊藤博文関係文書 書類の部 23〉
 12 「国会会議規則草案」尾崎三良 明治18(1885)年1月12日 〈請求記号 尾崎三良関係文書 138〉、「内閣職権」明治18年末頃 〈請求記号 牧野伸顯関係文書 書類の部 c101〉、「衆旨割記・改正衆旨概言」明治18年12月 〈請求記号 元田永孚関係文書 109-23〉
 13 国会開設を前に、自由民権諸派の在野勢力が結集して反政府



く。大隈と他の藩閥政治家との対立はますます先鋭化し、同年10月の開拓使官有物払下げ事件⁹で最高潮に達して、ついに前述のような決定を見るに至ったのであった。なお、この直後に自由党、改進黨が結成されるが、その模様を伝える史料¹⁰も展示した。

4 議会にむけての具体的準備

展示会「第3章 大日本帝国憲法制定・帝国議会開設へ」は、明治14年の政変後から帝国議会が開設される明治23（1890）年までを対象とする。政変によって議会開設のタイムリミットが決まった以上、政界もそれを目標に動いていく。まず、明治15（1882）年に伊藤博文が憲法調査のため欧州行を命じられた際の目的と出張の様子を示した史料¹¹、つづいて伊藤帰国後の明治18年に採用された内閣制度に関する史料¹²を展示した。他方、民権派の動きも急となった。議会開設を前にして運動も具体性を帯びるようになり、明治19～20年頃には党派の枠を越えて大同団結運動¹³、三大事件建白運動¹⁴が盛り上がり、首都は

騒然となったため、保安条例が施行された。しかし、その陰で運動は転機を迎えつつあった。すなわち、議員たらんとする者と、幕末の志士のように依然として運動家たらんとする者に分離しつつあったのである。そして、後者には松方デフレ¹⁵による経済不況もあって、テロや蜂起などの激化事件を引き起こす者もいた。以上のような激化事件と取締りに関する史料¹⁶を中心に展示した。

憲法は、伊藤博文を中心に井上毅・伊東巳代治・金子堅太郎らによって起草が進められ、井上毅作成の甲案・乙案を土台に、ロエスレル¹⁷の草案¹⁸を参考にして、明治20（1887）年8月には伊藤所有の無人島夏島で夏島草案（前頁右写真）が作成された。草案は修正され、さらに枢密院の審議を経て成案となり、ついに明治22年2月11日発布されるに至った。ただし、発布式翌日に黒田清隆首相が行った演説¹⁹で「超然主義」（政府は議会から政治的な影響を受けないという立場）が表明されたように、議会の権限は制限されており、政党そのものを否定する藩閥政治家もいた。つまり、議会政治、政党政治の前途は、なおも険しかったのである。

運動を展開した。明治19（1886）年10月の全国有志懇親会が端緒とされる。

- 14 外相井上馨の条約改正案に反発し農相谷干城が辞職したことを契機として、全国各地で展開された反政府運動。その要求は言論・集会の自由、地租軽減、外交の回復という三大事件にまとめられ、明治20（1887）年10月、高知県人民代表らが建白書を元老院に提出するなど活発な運動が進められた。
- 15 明治14年の政変後、大隈に代わり大蔵卿となった松方正義は、財政を安定させるため紙幣整理等の政策をとったが、その結果深刻なデフレーションが生じた。
- 16 大阪事件関係者獄中書翰 明治19年 <請求記号 龍野周

一郎関係文書 158>、五十嵐武彦・三浦文次書翰 小針重雄宛 明治16（1883）年7月19日 <請求記号 加波山事件関係資料 34>など。

- 17 Rösler, Karl Friedrich Hermann (1834-1894) ドイツの法・経済学者。明治11（1878）年12月外務省顧問として来日。のち内閣顧問となる。明治26（1893）年帰国。レスレル、レスラーとも呼ばれる。
- 18 明治20年 <請求記号 伊東巳代治関係文書 2>
- 19 「憲法発布に際しての黒田首相演説」 明治22（1889）年2月12日 <請求記号 牧野伸顕関係文書 書類の部 84>



議会開設を前に出版された政治小説

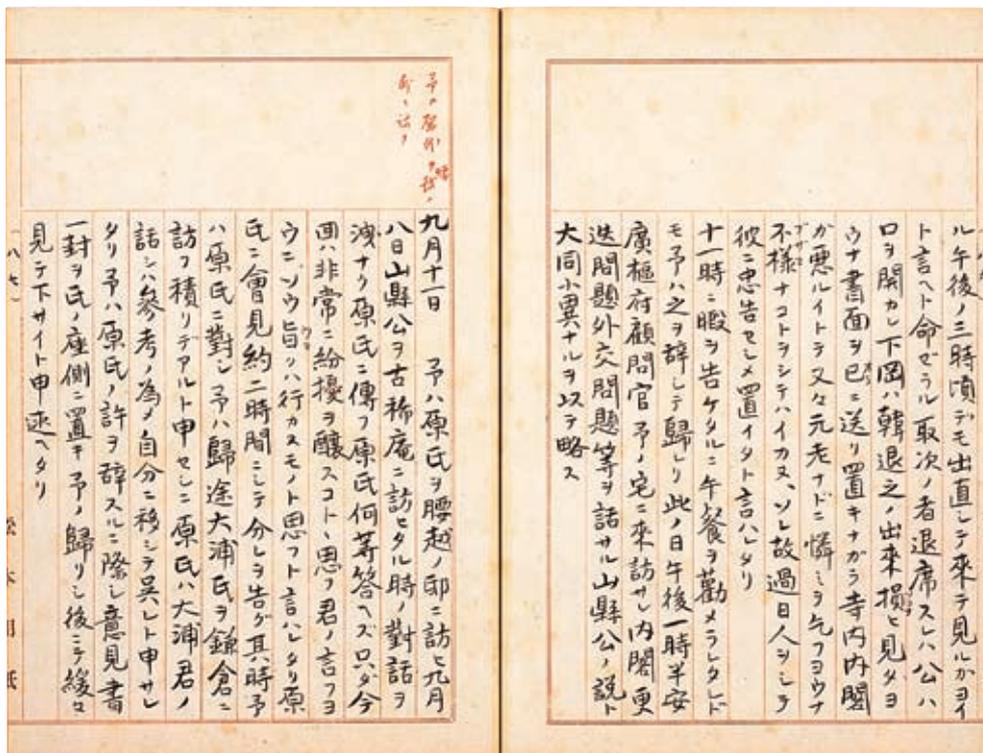
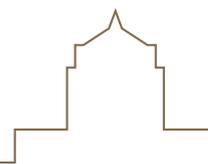


左から 香夢亭桜山（名倉亀楠）著『二十三年国会道中膝栗毛』 和田庄蔵 明治20（1887）年
洋々道人（岡安平九郎）著『老若男女国会合点』 岡安平九郎 明治23（1890）年
逢水漁史（安西与四郎）著『二十三年候補者の夢』 鶴鳴館 明治22（1889）年
服部撫松（誠一）著『二十三年国会未来記』 仙鶴堂、新古堂 明治19-20（1886-1887）年
『二十三年国会未来記 第2編』 口絵「国会議場に於て歳出予算案に対し議論沸騰の光景」

帝国議会開設当初、有権者の資格が直接国税15円以上を納める25歳以上の男子であったことは周知の通りだが、じつは藩閥政府も民権論者も理念的には普通選挙を認めていた。しかしその上で、両者ともに現実的な対応として、納税要件を設定することに賛成したのである。理由は、国民には未だ政治的知識と自覚が乏しく、もしそんな彼らに選挙権を与

え国運を委ねれば国家は混乱するだろう、という「時期尚早」論にあった。ここに展示した刊本は、そんな「知識」に乏しいと思われていた国民に、あの手この手で早く議会を理解させようとした努力の結晶であるといえよう。また、単にそれだけでなく、当時の世相や世界観が如実に現れている点も面白い。

※上の4点はすべて「近代デジタルライブラリー」
(<http://kindai.da.ndl.go.jp/>) でご覧になれます。



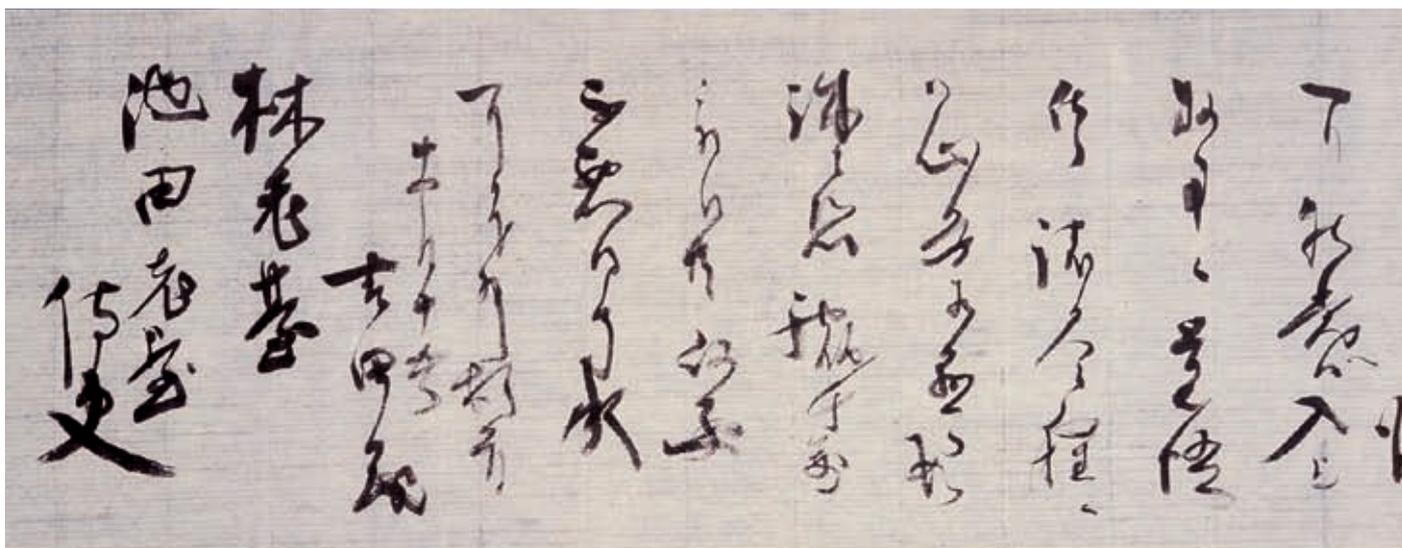
政治日誌 壺巻 <請求記号 松本剛吉関係文書 38>
日誌を記した松本剛吉は元老山県有朋の政治秘書。山県は当初政党内閣を避けようとして動いていたが、政友会総裁であった原敬に内閣組織の大命が下った。写真は、大正7年9月8日・11日の部分。

5 昭和戦前期の政党内閣時代

以上で第1部は終了し、つづいて大正後期から昭和35（1960）年を対象とした「第2部 昭和の政党政治」に移る。これまで見てきたように、議会開設時には一般国民は「知識」が不足しており、政党も十分に認知されていなかった。それから34年後の大正13（1924）年、護憲三派内閣の成立を機に政党政治が始まり、普通選挙（ただし男性のみ）も実現したのである。議会政治史にとって重要なこの34年間は、同時に開催される憲政記念館主催の展示会で取り扱っている。したがっ

て、両方の展示会を観ていただければ、我々としても大変に嬉しい限りである。

さて「第1章 戦前期政党政治の展開」であるが、大正7（1918）年、原敬によって最初の政党内閣が成立した（上写真）。しかし、それで政党内閣制度が確立したとはいえなかった。大日本帝国憲法では、天皇の下に内閣や議会・軍部などがほぼ横並びに配置されて突出した機関がなかったため、状況によっては前述の「超然主義」も、そして政党内閣も可能だった。表現を変えれば、強い政治力を持った政治集団が内閣に近づいたのであ



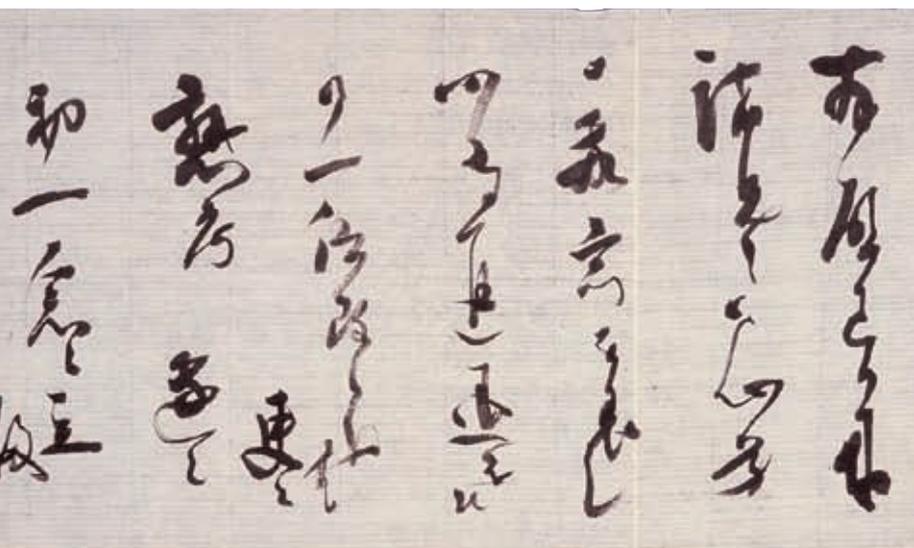
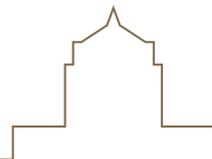
る。原敬の率いる政友会は山県有朋を中心とする官僚閥・軍閥に対し優位に立つことには成功したが、衆議院全体が官僚・軍機構に対し優位に立てたわけではなかった。この課題を実現したのが護憲三派内閣²⁰で、以後「憲政の常道」という合言葉の下で立憲政友会・憲政会（立憲民政党）による政党内閣制が行われた。展示会では、この間の経緯を示す史料を中心に展示した。

普通選挙が実現したことにより、日本の議会政治は形式的には、女子参政権を除けば、もうこれ以上は望めないような一定の到達点に至り、あとはそれに内実を伴うことが要請される段階になったのである。

普通選挙は十分な準備の下で実施された²¹。そして、両党および進出の機会を得た無産政党²²は、生活問題を中心に国民大衆に向かって訴えた²³。しかし、政権欲に取りつかれたかにみえる政党への批判、世界恐慌および昭和恐慌の国民生活への直撃、そして満州事変への国際的非難、と内閣を取り巻く環境は厳しかった。最終的には昭和7（1932）年の5・15事件²⁴によって、内実を伴うだけの十分な時間を与えられないまま、政党内閣は幕を閉じたのである。ここでは、必死に国民の支持を得ようとしながらも、時代に振り回されていく政党の姿を示す史料を中心に展示した²⁵。

20 憲政会・立憲政友会・革新倶楽部の3派による大正13（1924）年6月～翌14年7月の加藤高明内閣。
21 「選挙の心得」 昭和3（1928）年 <請求記号 憲政資料室収集文書 1312-11>

22 第一次世界大戦と第二次世界大戦の中間期に結成された、労働者・農民のための合法的な政党。
23 「日本労働党第一回全国大会提出本部議案及報告」 昭和2（1927）年11月 <請求記号 浅沼稻次郎関係文書 1> など



吉田茂書翰 林譲治・池田勇人宛 昭和30年11月15日 <請求記号 林譲治関係文書 34-17>
自由民主党結成当日、新党には当面参加しない旨を腹心の林と池田に書き送ったもの。吉田が入党したのは昭和31年2月1日であった。

6 55年体制の成立

昭和20（1945）年8月15日の敗戦につづく占領軍の統治下では、政党内閣の復活、女子参政権の実現、議院内閣制を規定する日本国憲法の制定など民主化が推進された。そして、昭和26（1951）年9月8日、日本はサンフランシスコ講和条約調印によって独立を果たし、政党政治はいよいよ正念場を迎えた。ただし、このときも米ソの激しい対立など国際環境は、日本の政治に大きな分裂を生み出した。そればかりでなく、対米協調的な吉田茂に対し、公職追放から解除された鳩山一郎らは、自主独立を旗印に強い不満を表明した。「第2章 55年体制の成立」は、これらの対立と収束

に関する史料を展示した。

まず、本章前半は吉田・鳩山グループ間の激しい確執に関する史料を掲げている（上写真）。この対立が収束して昭和30（1955）年の自由民主党結成となり、同時に左・右の社会党も再統一を果たした。この結果、保守対革新という二大陣営が構築され、二大政党時代に向かうのではないかという予測がなされた。そして、実際に昭和35年には日米安保条約改定をめぐって、両者の対立は頂点に達した。本章後半はこの安保改定にかかわる史料²⁶から構成されている。

（すえたけ よしや）

24 海軍革新派の青年将校が中心となって首相官邸、立憲政友会本部、警視庁、三菱銀行等を襲撃し、犬養毅首相等を射殺したテロ（クーデター未遂）事件。失敗に終わったものの社会に大きな衝撃を与え、挙国一致内閣の実現、軍部の政治力の増大、急進的運動に対する国民の共感などを招いた。

25 「第五十九回議会議場日誌」 昭和6年3月18日 <請求記号 大木操関係文書 183>、「原田熊雄日記」 昭和6年9月23日 <請求記号 原田熊雄関係文書 2-15～2-18>

26 「総長所感日誌」 昭和35（1960）年5月19日 <請求記号 鈴木隆夫関係文書 27>など



電子展示会「史料にみる日本の近代」

開国から戦後政治までの軌跡

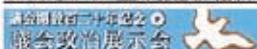
◆ 国立国会図書館 ◆ 電子展示会一覧

- はじめに
- 第1章 立憲国家への始動
- 第2章 明治国家の展開
- 第3章 大正デモクラシー
- 第4章 立憲政治の危機
- 第5章 新日本の建設
- 第6章 **55年体制の形成**
- コラム
- 年表
- 掲載資料一覧

史料にみる日本の近代

開国から戦後政治までの軌跡

▶ 12/16(水) 10(金)、議会開設120年記念議会政治展示会を東京で開催。



▶ 「第6章 55年体制の形成」を追加しました。

歴史史料とは何か

歴史史料はこう使う

スライドショー

English

参考文献 | リンク集 | ご利用について | サイトマップ

<http://www.ndl.go.jp/modern/>
国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 電子展示会

国立国会図書館は、平成18年7月から、電子展示会「史料にみる日本の近代」をホームページで公開しています。平成22年11月29日は議会開設120年にあたることから、記念の議会政治展示会(本誌4～13ページ参照)を開催するとともに、電子展示会で新たに第6章「55年体制の形成」を公開し、合わせて展示会のサブタイトルを「開国から戦後政治までの軌跡」と改めました。

第6章「55年体制の形成」では、昭和26(1951)年から36(1961)年までの約10年間について、

主に議会政治史に関連する史料30余点を掲載しています。ここでは、新たな章の項目ごとに、その時代背景とおもな掲載史料をご紹介します。

1 吉田内閣から鳩山内閣へ

昭和26(1951)年9月の講和条約締結を前に、鳩山一郎ら大物政治家の公職追放が解除され、政権を維持する吉田茂に反対する勢力の結集と政界再編への動きが強まりました。度重なる衆議院解散、造船疑獄事件などで支持率が低下する吉田政



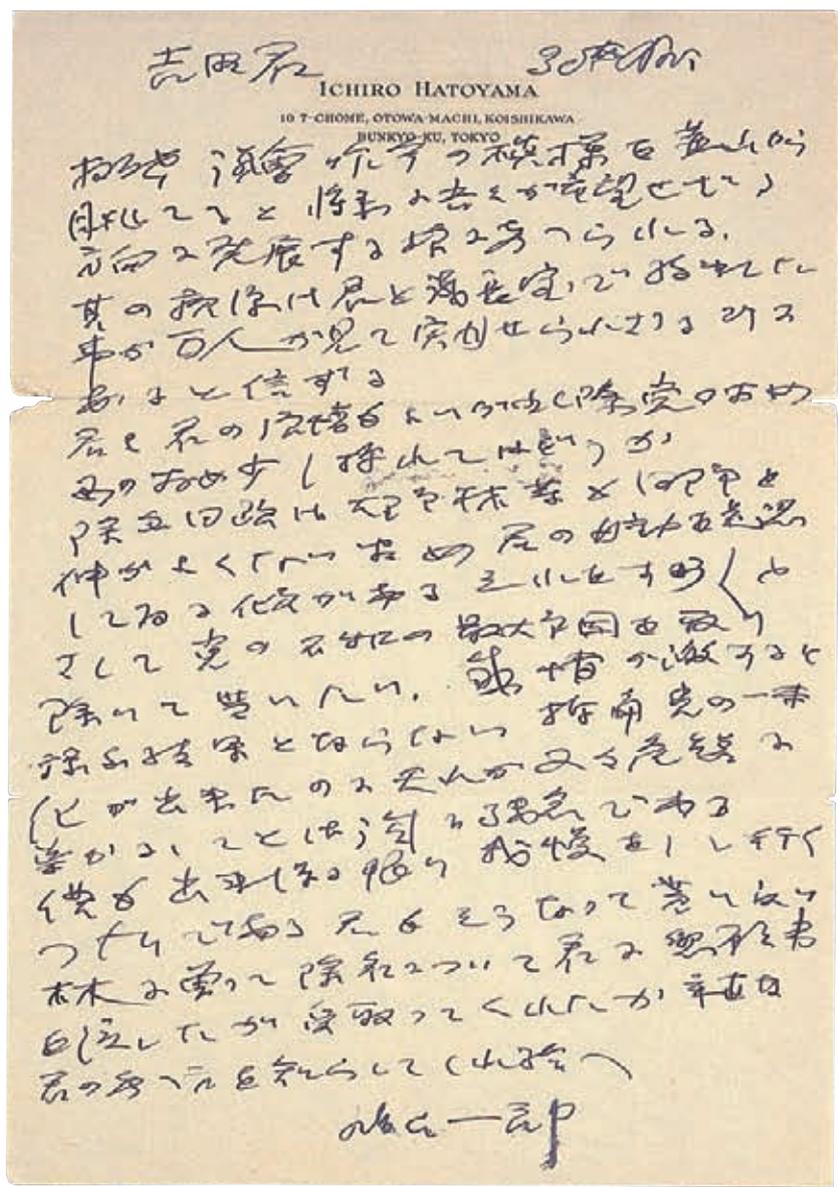
権に対して、昭和29（1954）年11月、反吉田系の保守新党として日本民主党が結成され、鳩山が総裁となりました。翌月吉田内閣は総辞職し、鳩山内閣が成立しました。

おもな掲載史料

与党自由党内での吉田と反吉田の確執がうかがえる史料として、吉田茂や鳩山一郎の書翰、自由党内の反吉田勢力による「分党声明書」をはじめ、日本民主党結成に関する一連の史料（「新党促進準備会」等）など。

2 55年体制の成立

昭和30（1955）年2月の総選挙で、鳩山内閣与党の日本民主党は、過半数を獲得することができませんでした。一方、講和問題をめぐり左右に分裂していた社会党の再統一の動きが強まったこともあり、保守合同への気運は高まりました。同年10月に社会党が統一し、続く11月に



鳩山一郎書翰 吉田茂宛 昭和27年11月30日 <請求記号 林譲治関係文書 5-11 >

は日本民主党と自由党が合併し、自由民主党が結成され、二大政党対立の図式（いわゆる「55年体制」）が成立しました。



遊説演説原稿 昭和32年1月 <請求記号 石橋湛山関係文書 563 >

おもな掲載史料

社会党統一および自由民主党結成関係史料(「日本社会党統一大会宣誓書」「芦田均日記」ほか)をはじめ、鳩山内閣下での日ソ交渉に関する史料(「野村吉三郎メモ」「吉田茂書翰」)、鳩山から政権を引き継いだ石橋湛山首相の演説原稿など。

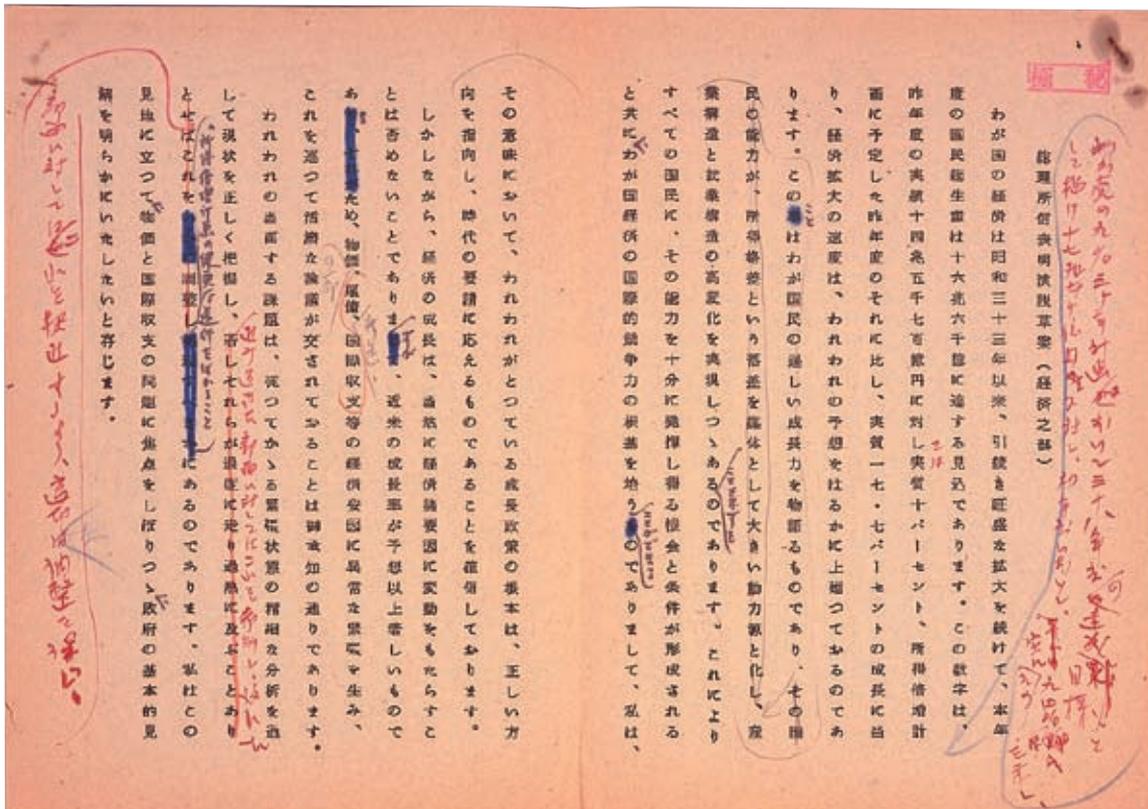
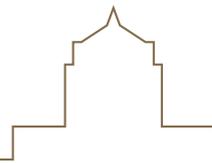
3 安保闘争前後

岸信介内閣下の昭和35(1960)年、日米安全保障条約の改定をめぐって与野党が激しく対立

し、国会は混乱しました。院外でも国民を巻き込んだ空前の反対運動が起こりましたが、6月19日に条約は自然成立しました。翌7月、岸内閣は退陣、池田勇人内閣が成立しました。池田首相は「寛容と忍耐」を唱え、経済重視政策への転換を打ち出し、高度経済成長が促進されていきました。

おもな掲載史料

警察官職務執行法の改正や安保条約改正をめぐる国会論戦と混乱を示す史料(「石橋政嗣質問ノ一



総理所信表明演説草案 経済部 昭和36年9月27日 <請求記号 高橋亀吉関係文書 2707>

ト」「事務総長所感日誌」ほか)に加えて、高度経済成長政策を象徴する池田首相の所信表明演説草案など。

他の章と同様に、読みにくい史料については、テキストを掲載しています。また、展示会監修者季武嘉也氏(創価大学教授、当館客員調査員)の執筆による歴史の裏話を紹介する「コラム」2編も収録しています。

この新たな章で扱っている時期は、サンフランシスコ講和条約の締結に伴う日本の独立回復以降、「55年体制」の成立を経て、安保国会、高度経済成長へと向かう戦後日本の激動の時代です。半世紀以上を経過しており、歴史研究の対象ともなっています。今回は、日本語版から英語版への画面遷移などの機能も改修を行い、より使いやすいサイトを目指しました。どうぞご覧ください。

(主題情報部政治史料課)



帝国議会の歴史をひもとく

帝国議会会議録検索システム

帝国議会会議録は、帝国議会（明治23年11月～昭和22年3月）における審議の様子だけでなく、当時の政治、世相の息吹を伝える一級の歴史資料です。議会制度120年の節目となる今年、「帝国議会会議録検索システム」ですべての会期の本会議・委員会の速記録をインターネットにより見ることができるようになりました。

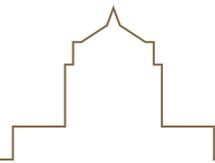


<http://teikokugikai-i.ndl.go.jp/>

帝国議会の時代

初期の帝国議会で特徴的なのは、「強兵」を推進する政府と「民力休養、政費節減」を求める民党との激突です。帝国議会は現在の国会に比べるとその地位は低く、権限も小さかったのですが、政府は「超然」たる姿勢をとるだけでは法案や予

算をスムーズに成立させることができないという観点から、政党の協力を得て議会の運営していきます。大正期になると、憲政擁護運動などを経て議会の運営は一步進み、政党内閣制に近づきます。しかし、言論の機関としての議会は、軍部の台頭とともに、昭和初期には次第に機能の低下に追い



込まれていきました。

帝国議会は幾多の名演説を生みました。代表的な例としては、尾崎行雄の桂内閣弾劾演説（第30回 大正2年2月5日 衆議院本会議）、浜田国松の腹切り問答（第70回 昭和12年1月21日 衆議院本会議）、齋藤隆夫の肅軍および反軍演説（第69回 昭和11年5月7日 衆議院本会議、75回 昭和15年2月2日 衆議院本会議）などが挙げられます。

「会議録」とは？ 「速記録」とは？

帝国議会の会議録にいくつかの種類があるのをご存じでしょうか。本会議では、貴族院・衆議院ともに「速記録」と「議事録」が作成されました。「速記録」とは文字どおり、発言者の一語一句を速記者が書きとったものです。「議事録」とは日時、出席者、議題、評決などの要点を記載したもので、ともに重要な議会文書です。本会議の速記録は翌日の官報に掲載されるのが慣例です。

一方、委員会では多くの回で「会議録」（本会議の議事録に類似した内容）と「速記録」が作成されています。ただし、委員会では、速記が付されない審議も多く存在します。また、「筆記」として要点のみをまとめた一種の速記録も存在します。「帝国議会議録検索システム」では、本会議・委員会とも「速記録」を収録しています。

これとは別に「秘密会議ハ刊行スルコトヲ許サス」（議院法第39条）との規定に基づく「秘密会」の速

記録があります。秘密会の速記録は、『帝国議会議録検索システム』¹『貴族院秘密会議事速記録集』²などで大半を確認することができます。

読みやすいデジタル画像を求めて

「帝国議会議録検索システム」は、帝国議会全会期（第1回～第92回）の速記録（目次・索引・附録・追録を含む）のデジタル画像を収録しており、その分量は、総計で約31万4千ページに及びます。そのうち戦後期の帝国議会（第88回～第92回）についてはテキストデータもあり、議事内容、発言内容の全文を検索することができます。一方、戦前・戦中期の帝国議会（第1回～第87回）については画像データのみを提供しています。このため、画像データの質を高めることに力を注ぎました。

デジタル化の原本には、国立国会図書館が所蔵する冊子のうち、状態の良いものを用いました。しかし、原本のページを事前にすべてチェックしたところ、劣化・破損・書込みなどのあるページも多く含まれていました。それらのページについては、館内にある別の冊子のほか、衆議院・参議院が所蔵しているものから状態のよいページを探しました。このような作業を必要としたページは、約17,200ページ（全画像の約5.5%）に達しました。

1 衆議院事務局刊 1996 <請求記号 BZ-6-11>

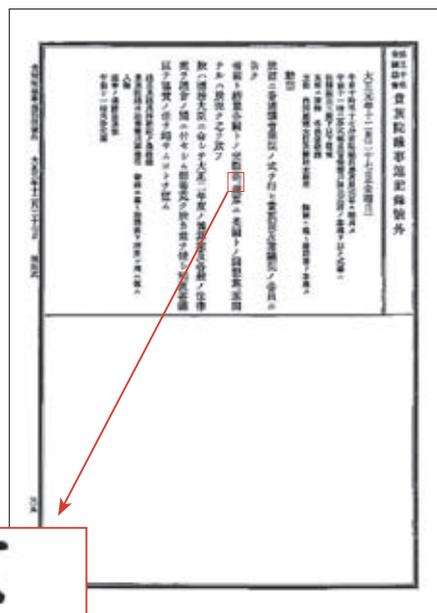
2 参議院事務局編 参友会刊 1995 <請求記号 BZ-6-1>



画像を補正した例
 (「第二十六回帝国議会貴族院地租条例中改正法律案外十六件特別委員会議事速記録第一号」)

デジタル化に際しては、原本の黄ばみ・汚れを除去する、印影を消去する、裏写りを補正する、文字がつぶれないように濃度を調整するなど、原本の発行当時の仕上がりを再現するよう努めました(上左写真)。

作業は外部に委託しましたが、納入された画像を点検する過程で、思いもよらない作業ミスが発覚したこともありました。例えば、繰返し符号(上右写真)が汚れと間違えられて、除去されてしまっていたのです。今となっては笑い話ですが、もちろん、すぐに該当ページの再作成を指示しました。



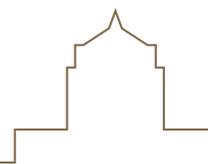
繰返し符号の例

再作成した画像は、約6,300ページ(全画像の約2%)にのぼりました。

「帝国議会会議録検索システム」の使い方

「帝国議会会議録検索システム」には、3種類の検索方法があります。その一つは目次・索引検索で、当時の速記録に付されていた目次や索引などのテキストデータを検索できます。

もう一つ、便利な検索方法として、「発言者検索」があります。会期、開会の日付、会議の区別(本会議、委員会などを指定)から調べられます。



検索方法

目次・索引検索
 議案番号検索
 発言者検索

検索方法についての詳細はこちらをご覧ください。

議案指定

国会開催日
 選択 から まで

議場指定

すべて
 衆議院
 参議院
 両院協議会

議案名指定

議案名は議案指定の場ではキーワードを入力していただき、
 国会の目次・索引、会議録情報と
 国会の会議録検索結果により検索が行われます。

目次・索引検索

検索方法

目次・索引検索
 議案番号検索
 発言者検索

検索方法についての詳細はこちらをご覧ください。

議案指定

国会開催日
 選択 から まで

国会日付
 選択 年 月 日から
 年 月 日まで

議場指定

すべて
 衆議院
 参議院
 両院協議会

議案名指定

議案名 選択

 其の他 から まで

発言者指定

発言者名 選択

 録音機 選択

 原簿会議 選択

 原簿 選択

発言者検索

帝国議会では「予算委員会」「請願委員会」など常任委員会も存在していましたが、法律案などの審議においては、案件ごとに委員会が設置されており、多数の名称の委員会が一つの会期に併存しています。画面内の「会議名指定」の選択ボタンをガイド代わりにお使いいただくと便利です。発言者がわかっている場合は、「発言者指定」機能をご利用ください。

また、「戦後会議録」画面では、発言の全文を検索することが可能です。

帝国議会によって生み出された記録のうち、速記録は最も基本的な記録のひとつです。当時の政治や歴史、世相を知る手段として存分に活用していただければ幸いです。

(調査及び立法考査局)

関連データベース

国会会議録検索システム



<http://kokkai.ndl.go.jp/>

第1回国会(昭和22年5月)以降の速記録(すべて「会議録」と呼ばれる)を発言の全文から検索できるデータベースです。

日本法令索引



<http://hourei.ndl.go.jp/SearchSys/> (日本法令索引)
<http://dajokan.ndl.go.jp/SearchSys/> (明治前期編)

明治維新から現在までの法令の制定や改廃の沿革を調べることができます。一部の法令は全文を見られます。
 *詳しくは本誌590(2010年5月)号 pp. 32-34参照。

国会と歩んで60年 一月刊誌『レファレンス』

今年は議会開設120周年。国会サービスを主に担当する調査及び立法考査局では、『レファレンス』11月号（718号）で「議会開設120年に寄せて」の特集を組んでいます。

『レファレンス』は、国政課題に関する調査論文を掲載する月刊誌です。毎月、各分野から多彩なテーマを取り上げており、最近の目次には、子ども手当、水問題、情報通信政策、年金、英国の総選挙、法人税、住民投票などが並んでいます。執筆者は調査及び立法考査局の調査担当職員です。内容の高度さとわかりやすさとを両立させるため、調査を重ね入念に推敲し、幾度もの査読と校正を経て、『レファレンス』はできあがります。国会審議に資するため国会関係者へ配付するとともに、ホームページにPDF版を掲載しています*。

調査企画課編集係は、『レファレンス』をはじめとする調査及び立法考査局の刊行物の校正、執筆者との調整、印刷会社との打ち合わせといった編集・出版事務を担当しています。席に座っている時間は意外と少なく、ぱたぱたと動き回ることの多い日々です。刊行物が形になったときの達成感や、読者のみなさまからの反響が、原動力になっています。また、多種多様な論文に目を通すことで、おのずと社会の動きに敏感になります。話題を先取りすることも



あり、うれしい一方で、気も引き締まります。

今回の特集号は、普段とは趣が異なり、歴史的な題材も掘り下げて扱う特別仕様です。2部構成で、帝国議会から現在の国会に至る日本の議会制度の変遷と、諸外国の議会をめぐる動向をまとめます。ぜひご一読ください。

『レファレンス』は、昭和26（1951）年5月の創刊以来、地道に号を重ねてきました。来年には60周年を迎え、日本の議会史の半分を国会とともに歩んできたこととなります。この歴史ある論文誌が、国会議員をはじめ、より多くの読者に届くことを願いつつ、赤ペンを握りしめ、校了に向けて奮闘する毎日です。

（調査企画課編集係 うさ耳）

*国立国会図書館ホームページ>国会サービス関連情報
>立法調査資料>レファレンス (http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/reference_index.html)

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

絵葉書のなかの土佐

移ろいゆく時代の記憶 展示解説図録

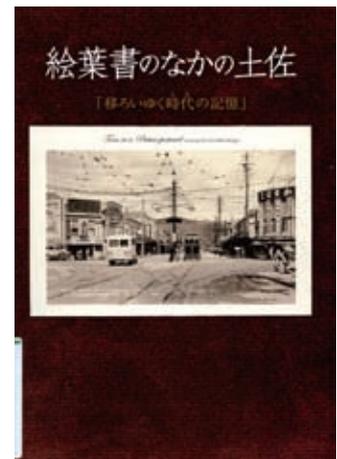
高知県立歴史民俗資料館編・刊
〒783-0044 高知県南国市岡豊町八幡1099-1
2008.9 103頁 30cm <請求記号 GC256-J6>

本書は、平成20年9月26日から11月24日まで高知県立歴史民俗資料館で開催された企画展「絵葉書のなかの土佐—移ろいゆく時代の記憶—」の展示解説図録である。内容は「郵便事業の発展と絵葉書」「Ⅰ 逓信省発行絵葉書と絵葉書ブーム」「Ⅱ 絵葉書がとらえた世相」「Ⅲ 絵葉書のなかの土佐」の4項目から構成され、その中でも「Ⅲ 絵葉書のなかの土佐」が全体の8割を占めている。

絵葉書は、明治33（1900）年に郵便法が公布され、国内で私製葉書が認可されたことで大ブームとなり、一般に流通するようになった。本書によれば、高知県では、明治40（1907）年以降、皇族の来高が相次ぎ、訪問先に選ばれた学校や市町村が記念絵葉書を注文したことを契機に、観光名所、記念行事や日常生活などを収めた高知県限定の絵葉書が出回ったとのことである（p.25）。「Ⅲ 絵葉書のなかの土佐」には、歴史民俗資料館のほか、高知市民図書館の安芸文庫や個人が所蔵しているそのような絵葉書が、「懐かしい風景」「土佐の生業・産業」「鉄道開通・南国土佐大博覧会」「郷土部隊・歩兵第四十四連隊」などの11項目に分かれて紹介されている。絵葉書の中には、写真館や商會が発行したものから、個人が趣味で撮った写真を使って作成し、自店で発行したものまである。

本書の特筆すべき点は、絵葉書をとおして高知

県の昔の風景、町並み、人々の生活を垣間見ることができる点である。例えば、大正期から戦前にかけての高知城、桂浜、播磨屋橋、室戸岬、四万十川などの風景であり、高知市をはじめとするそれぞれ



の町や村の田園風景、港町や浜辺の風景である。また、今では目にする機会がない、二期作の一番稲の刈取りと二番稲の田植えの光景、室戸海岸での背美鯨の引上げ、解体作業の光景も見ることができる。

興味をひかれるのは、絵葉書に描かれた風景と現在のその場所の風景の対比である。木製の橋が鉄筋コンクリート製になったり、土で造られていた堤防がセメントで造り変えられたり、家の戸数が増えたりと変化はしているものの、全体の雰囲気や印象はあまり変わらない。棧橋や港の風景、のどかな町並みや山間部の村。明治、大正、昭和、平成へ時代は流れ、世代も替わり人も変わるなか、昔の風情を残す風景の数々。「高知」の中の「土佐」を感じることができる一冊である。

（調査及び立法考査局議會議官庁資料課 やまさき みわ 山崎 美和）

※1部1,000円（送料290円 別）で入手可能。詳細は資料館のウェブサイト（<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/museum.html>）参照。

国宝土偶展

文化庁海外展 大英博物館帰国記念

文化庁、東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション編
NHK、NHKプロモーション、毎日新聞社刊
〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9 (東京国立博物館)
2009.12 123頁 29cm <請求記号 GB114-J41>

土偶は人間を模して作られた土製の焼き物で、日本では縄文時代に作られ、人体をデフォルメした、異形ともいえるフォルムに特徴がある。著名なものとして、顔面がハート形の「ハート形土偶」、顔面がみみずく形の「みみずく土偶」、眼部が誇張され雪中遮光器を着けているように見える「遮光器土偶」などがある。本書では、これらを含む国宝・重要文化財級の土偶を大判のカラー写真で見ることができる。

縄文文化に影響を受けたことで知られる岡本太郎は、偶然訪れた上野の博物館で縄文土器を目にした時の驚きについて、「身体中の血が熱くわきたち、燃えあがる。すると向こうも燃えあがっている。異様なぶつかりあい。これだ!」と述べている(『画文集 挑む』講談社 1977)。

本書によれば、土偶は、縄文時代の人々の精神世界や信仰のあり方を具現化したものとされる。岡本太郎ほどではないが、土偶を見ていると、何かよくわからない異様な印象を受ける。

精神病理学者の木村敏は、芭蕉の「古池や」の句を例に、具体的な「もの」によって、言葉にできない「こと」の世界が立ち現れると述べている(『時間と自己』中央公論社 1982)。土偶によって、縄文時代の人々が見ていた世界のあり方、その不安や生命力の感覚が立ち現れてくるようにも思える。

中島敦の小説「木乃伊」では、エジプトに侵攻

したペルシヤ軍の部将が、ある墓所の中で一体のミイラを見つけ、それが前世の自分であることに気付く。

さらに、前世の記憶がよみがえる中で、前世の自分が、前々世の自分であ

る別のミイラと向かい合っている場面を思い出す。彼の見た「合せ鏡のやうに、無限に内に畳まれて行く不気味な記憶の連続」が我々の中にもあって、それを思い出すことがあるのかもしれない。

縄文時代は約1万年(100世紀)にわたって続き、今から2千数百年前に終わった。人口は全国で数万から数十万人、狩猟・漁労・採集によって暮らしていたと考えられている。

土偶は、再生と多産や安産祈願、豊かな獲物の象徴、病気や怪我を治すための身代わりなどと解釈されている。身近にあった生と死に対する当時の人々の強い関心がうかがえる。生と死が身近なものではなくなった現代においても、土偶に投影された心性を身近に感じることもあるように思える。

本書の土偶展は、イギリスの大英博物館で開催された土偶展の帰国記念展示として、東京国立博物館で開催された。イギリスでの展示会名は“THE POWER OF DOGU”で、その図録も国立国会図書館で見ることができる(British Museum Press 2009 <請求記号 GB114-B5>)。



(総務部総務課 井田 敦彦)

ふりかけの世界

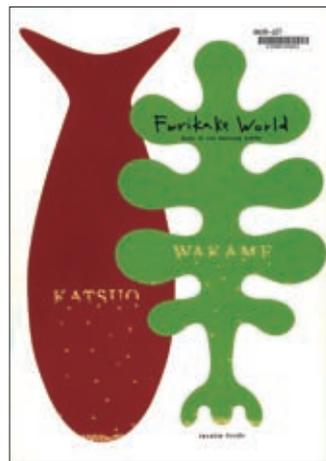
藤中義治監修 田中食品刊
〒733-0032 広島県広島市西区東観音町3-22
2009.7 129頁 30cm <請求記号GA36-J27>

ばらばらとページをめくると豊富なイラストや写真、カラー刷りの内容が目飛び込んでくる。そのまま見ていくと、ふりかけ製品のパッケージデザインの一つに手が止まる。深緑色を地にひよこの図柄、結構シュールだったりする。これって子どもの頃、見たことがあると、遠い記憶がよみがえる。たまごふりかけおいしかったな……。

本書は、広島にある100年以上の歴史をもつ食品会社の社史とも位置付けられる本であろう。ただし、会社の歩みに力点が置かれる訳ではなく、歴史・材料・製造法・レシピ・周辺雑学など多彩な視点から「ふりかけ」にせまっている。

本書の構成を追いかけてみよう。まず「瀬戸内ふりかけ探偵団」、人形劇よろしく、三人の子どもとふりかけ博士のかけあいで導入。「ふりかけ追想写真館 昔のパッケージコレクション」ではデザイナーによるふりかけ製品のパッケージの数々がデザインカタログのように陳列。「ごはんとうりかけのおいしい関係。」はフードジャーナリスト、ふりかけ製造会社社長、大学の先生、技術アドバイザーによる座談会。「ふりかけのルーツと素材をめぐる旅」「戦陣食からふりかけを見つめる」「ニッポンの米文化とふりかけ風土」は博物史的考察。「ふりかけをつくるということ」は製造技術。硬めの文章が続いたところで、「トモばあちゃんの旅行の友」は小説。「ふりかけれしび」「明日に架けるふりかけ」で

はレシピや食品学から記述。カフェオーナーや料理教室主宰者によるレシピ紹介など、ふりかけをめぐる様々な人々が登場。また、ところどころに「弁当グラフィティ」と題した写真入りの挿話があり、



時代背景とともにふりかけの存在が語られる。高度成長期は運動会のお弁当、バブル時代はコンビニ弁当、現代はデコレーション弁当やエコ・マイ弁当といった形で紹介されている。

ふりかけのルーツに関する箇所では、『家庭経済食物の調理』（大正7（1918）年刊）に「胡麻塩・黄粉・ゆかり・陳皮・香煎…飯・汁などに撒り注けて食用せらる（下線は筆者）」とあり、ふりかけの初出文献といえるのではないかと紹介されている（「近代デジタルライブラリー」で本文を見ることができる）。刊行者の田中食品は、軍事拠点であった呉市で明治34（1901）年創業、陸海軍から容易に運搬でき長期保存が可能な食品を求められ、瀬戸内の魚文化という地域性を背景として大正5（1916）年にふりかけを考案したそうである。日本人の食生活にふりかけが登場してまだ100年に満たないのである。

本書を読んで以来、食卓でご飯にふりかけをかけていると、ふと本書のことを思い出す。ふりかけという身近な食品から垣間見える歴史の断片、人間の知恵、日常の喜び……この世界も奥が深いものである。

（総務部企画課 ^{たかしな}高品 ^{せいや}盛也）



坂本龍馬 近江屋事件の現在

菊地 明



上写真 中岡慎太郎、坂本龍馬（電子展示会「近代日本人の肖像」<http://www.ndl.go.jp/portrait/> 所収）
下写真 近江屋外観（『大阪時事新報』明治42年2月9日「隠れたる豪傑 今井信郎翁（6）」<マイクロフィルム請求記号 YB-273>）

事件発生

慶応3年（1867）11月15日夜、滞京中の土佐藩重役・寺村左膳は芝居見物を楽しんでいた。四条大橋の東にある北座か南座でのことだったろう。

芝居が終わって帰途についた寺村のもとへ、家来が駆けつけてきた。寺村の日記には、そのときのことが次のように記されている¹。

随分（芝居）面白し。夜五（ツ）時に済み、近喜（下宿先）まで帰るところ、留守より家来あわてたる様にて注進これある。

子細は、坂本良（龍）馬、当時変名才谷樑太郎、並びに石川清之助（中岡慎太郎）、今夜五比（頃）、兩人四条河原町の下宿に罷りあり候ところ、三、四人の者参り、才谷に対面致したしとて名札差し出し候に付き、下男（藤吉）の者受け取り、二階へ上がり候ところ、右の三人あとより付きした（が）い、二階へ上がり、やにわに抜刀にて才谷、石川兩人へ切りかけ候ところ、不意の事故、兩人とも抜き合い候間もこれなく、そのまま倒れ候由。下男もともに切られたり。賊は散々に逃げ去り候よし。才谷は即死せり。石川は少々息は通い候に付き、療養に取り掛かりたりと言う。多分、新撰組等の業なるべしとの報知也。

京都の河原町通り蛸薬師の近江屋の2階に下宿していた土佐海援隊長の坂本龍馬が、同席してい

た土佐海援隊長の中岡信太郎とともに襲撃された「近江屋事件」についての、リアルタイムでの記録である。

慶応3年11月15日は西暦1867年12月10日であり、不定時法による「夜五ツ」は19時30分に相当する。この時刻に芝居が終わり、帰途についていたときというので、寺村の認識では20時過ぎごろのことだろうか。

また、龍馬の甥で、海援隊士だった高松太郎は、大坂で事件の第一報を受けると同志とともに現場へ急行していた。その高松が翌年1月に龍馬の家族へ宛てた手紙には、事件発生時刻が8時30分過ぎを示す「辰の半頃」²とされている。

もちろん、事件があったのは夜のことであり、午前中の「辰」ではない。おそらく、これは「辰」の半日後の20時過ぎを示す「戌」が本来の記述であり、これが誤記あるいは誤植されたものと考えられる。したがって、高松の認識では事件発生は20時30分過ぎということになる。

どちらとも判断に迷うところだが、事件があったのは20時前から20時30分にかけての時刻と考えて問題はないだろう。

現場遺留品／下駄

寺村左膳の日記にあったように、事件は新選組の犯行によるものと考えられた。証拠があるわけではない。新選組ならやりかねない、という判断

1 横田達雄編『寺村左膳道成日記 3』 県立青山文庫後援会 1980 <請求記号 GB391-121>（引用箇所はp. 50）
引用文は読み下し文とし、旧字を新字に、片仮名を平仮名に改め、句読点と送り仮名を補った。以下も同様である。

2 小笠（野）淳輔書簡 龍馬の兄権平夫婦宛（京都国立博物館所蔵「坂本家先祖書並系図」中「坂本龍馬遭難通知状写し」） 翻刻が岩崎鏡川「坂本と中岡の死」日本史籍協会編『坂本龍馬関係文書 2』 東京大学出版会 1989 pp. 357-472 <請求記号 GB391-E16>に掲載されている（引用箇所はp. 468）。

によるものである。

11月15日に入京した薩摩藩士・大久保利通が岩倉具視に宛てた、19日付の手紙にも「第一、近藤勇が所為と察せられ申し候」³と新選組を疑う記述があり、これが大方の見方だった。

現場の近江屋には、犯人のものと思われる遺留品があった。下駄と刀の鞘である。

近江屋の主人・新助は、その下駄に先斗町にある「瓢亭」の焼き印が押されていたことから、それを持って瓢亭で確認したところ、店員から「昨夜新選組の御方に貸しました」⁴との証言を得た。これによって新助は、新選組に疑いの目を向けたのだという。

しかし、同時代の記録はこれを否定している⁵。

跡に残し置き候品、左に

一、刀の鞘 一本 但し 黒塗

一、下駄 二足 但し 印付

内一足は 噲 かくのごとく焼き印これあり候由

内一足は 中 かくのごとく印これある由

近江屋に残されていたのは、「噲」こと噲々堂と「中」こと中村屋という、いずれも料理屋の下駄だったのである。これについては尾張藩の『雑記』⁶にも両店の下駄があったことが記録されて

おり、この事実を動かすことはできない。

では、誰がこの下駄を履いて近江屋を訪れ、下駄を残して去って行ったのだろうか。

この謎を解いてくれるのが、当日の天気である。

四条大宮に住む質屋渡世・高木在中の日記⁷によると、15日は「雨降り」で夜は「双(蒼)天」だった。16日は「双天、折々雨降る。夜同断(双天)」、17日も「双天」である。これによると、15日は雨天のため道はぬかるんでいた。16日は晴れたが、足下がよくなるのは16日の夜以降だったと思われる。

この状況で、噲々堂や中村屋にいた龍馬や中岡の仲間たちが事件を知れば、近江屋に駆けつけることは間違いない。そのとき道がぬかるんでいれば、店の下駄を借りることは不自然ではなく、駆けつけた近江屋からそのまま帰宅するつもりであれば、自分の履物を懐にしていた可能性は十分に

ある。そうした人物が何人かいて、2人だけが自分の履物で近江屋を立ち去れば、そこに2足の下駄が残るのである。

瓢亭の下駄など存在せず、2足の下駄も犯人特定

現場遺留品／刀の鞘

もう1点の遺留品である刀の鞘は、有力な証拠

3 翻刻が日本史籍協会編・刊『大久保利通文書 第2巻6』1927 pp. 39-40に掲載されている。〈マツノ書店2005年刊の復刻版 請求記号 GB421-H68〉

4 前掲(注2)岩崎鏡川「坂本と中岡の死」『坂本龍馬関係文書 2』p. 390

5 鳥取藩記録 慶應3年11月23日(坂本龍馬、中岡新太郎遭害之件)『大日本維新史料稿本マイクロ版集成 東京大学史料編纂所蔵』丸善 1995 <東京本館図書課別室蔵 マイクロフィルム請求記号 YD1-379> リール番号 KE-154 827~833コマに収録されている

(引用箇所は830コマ目)。また、翻刻の一部が万代修著『新選組こぼれ話』鳥影社 1984 <請求記号 GB421-238> pp. 109-112に掲載されている(引用箇所はp. 110)。

6 尾張藩文書(名古屋市蓬左文庫所蔵 慶応三年ノ四)翻刻が前掲(注5)『新選組こぼれ話』p. 109に掲載されている。

7 「鍵屋長治郎(高木在中)日記」翻刻は、内田九州男、島野三千穂編『幕末維新京都町人日記』清文堂出版

となる可能性があった。所有者さえ特定できれば、何らかの情報を得ることができる。

しかし、鞘の存在はいつしか忘れ去られてしまう。

新選組から分離して御陵衛士として活動していた伊東甲子太郎が、鞘の持ち主を新選組の原田左之助と証言したというエピソードも、伊東が事件当日に近江屋を訪れ、龍馬と中岡に新選組が狙っているのに注意をするように忠告したというエピソードも、実は明治中期以降に生み出されたもので、これらを裏付ける記録はない。

土佐藩は新選組の犯行と断定するのだが、その根拠となる証言をしたのは伊東と同じく御陵衛士となっていた阿部十郎らである。阿部らは11月18日に伊東甲子太郎が新選組に殺害されると、伏見の薩摩藩邸に潜伏していた。

それを知った土佐藩士・谷干城と毛利恭助は、薩摩藩士・中村半次郎（のちの桐野利秋）にともなわれて伏見へ向かい、中村の日記に「我は土州藩士毛利暴（恭）助・谷清兵衛（干城）同行にて伏見の（に）越し泊す」⁸とある。11月21日のことである。

このときに尋問を受けた阿部は、明治33（1900）年の史談会の席上で次のように語っている。

土州の毛利郷（恭）助、ただいまの貴族院議院谷干城なる者がたびたび参りまして、坂本龍馬を撃

ちました者を詮索致しました。どういう声音であったか、何でも新撰組に違いないということでございまして、龍馬を撃ちました時分に「仕止めた、仕止めた」と言って声を上げました。話を致しまして、マアこういう声音で、中国か四国辺の者であろうという声音であったということがございます⁹。

谷と毛利が犯人特定の証拠としたのは、刀の鞘ではなく、息絶え絶えの中岡が漏らした「声音」だったのである。もちろん、阿部は彼らが鞘を持参していたことについては語っていない。鞘もまた、犯人に結び付くものではなかったのである。

谷たちの話を聞いた阿部は、「そうしますと、今の伊予の松山藩でございましょう、新撰組の原田佐（左）之助という者があって、その声によく似て居りますので、果して佐之助であろうということになりました」¹⁰と、新選組犯行説の根拠を語るのだった。

これほどまでに、新選組犯行説は脆弱なものだったのである。

それでも、この証言によって新選組の犯行を確信した谷らは、土佐藩を通じて新選組を幕府に告発し、11月26日に「近藤勇、今日御呼び立て、御調べの由」¹¹と、近藤勇からの事情聴取が行われた。当然、近藤は否定したが、12月には王政

1989 <請求記号 GB391-E22>（引用箇所はp.277）

8 田島秀隆編・刊『京在日記利秋』1970（私家本）現代語訳および解説が栗原智久編著・訳『桐野利秋日記』PHP研究所 2004 <請求記号 GK74-H63> p.119-120に掲載されている。

9 [阿部隆明述]「新撰組の本旨附十六節」『史談速記録』(90) 史談会 1900 pp.19-46（引用箇所はp.32 原書房1972年刊の複製版『史談会速記録 合本15』<請求記号 Z8-983>ではp.290）

10 前掲（注9）「新撰組の本旨附十六節」『史談速記録』(90) pp.32-33（原書房1972年刊の複製版『史談会速記録 合本15』ではpp.290-291）

11 「神山佐多衛（郡廉）日記 自慶応3年9月至明治2年8月」（東京大学史料編纂所蔵）龍馬暗殺に関係する部分の翻刻が平尾道雄著『中岡慎太郎陸援隊始末記』中央公論社 1977 <請求記号 GB354-49> pp.243-246に掲載されている（引用箇所はp.246 11月26日の記載）。

復古、翌年1月には鳥羽伏見戦、さらには戊辰戦争と続き、真相の糾明は中断してしまうのである。

京都見廻組説

元京都見廻組の今井信郎が、新政府の取り調べによって近江屋事件について供述したのは明治3(1870)年2月のことだった。

兵部省と刑部省での供述書があるが、要点を押さえている兵部省でのものを引用しよう¹²。

坂本龍馬を殺害の義は、見廻組与頭佐々木唯(只)三郎より差(指)図にて、(中略)佐々木唯三郎先立ち、渡辺吉太郎、高橋安次郎、桂隼(早)之助、土肥仲蔵、桜井大三郎、私共都合七人にて瓦(河原)町三条下ル龍馬旅宿(近江屋)へ昼参り候ところ、同人留守にて、其夜五ツころ再び参り候ところ在宅に付、佐々木唯三郎先へ参り、跡より直ちに桂隼之助、渡辺吉太郎、高橋安次郎、二楷(階)へ上り、土肥仲蔵、桜井大三郎は下に控え居り候ところ、二楷の様子は存じ申さず候えども、二楷より下り申し聞け候には、召し捕り申すべくのところ、両三人居合わせ候間、よんどころなく打(討)果し候旨申し聞け、直ちに立ち退けとの申す事故、一同右場所立ち退き……

つまり、指揮官の佐々木只三郎と渡辺吉太郎・

桂早之助・高橋安次郎の四人が近江屋の2階に上がって龍馬と中岡慎太郎を殺害し、今井信郎は土肥仲蔵・桜井大三郎とともに1階の見張り役を務めていたというのだ。

龍馬を襲撃した理由については刑部省の供述書に詳しく、「先年、伏見に於いて捕縛の節、短筒を放じ捕手の内、伏見奉行組同心二人打倒し、其機に乗じ逃げ去り候ところ……」¹³と、慶応2年1月の寺田屋遭難事件のさいに、龍馬が捕り方2人を射殺し、逃走したことをあげている。この出来事については事実であり、襲撃は殺人・逃走犯に対する公務の執行であったことに間違いはない。

これらの供述が認められ、今井は明治3年9月に近江屋事件への関与と、衝鋒隊の副隊長として箱館戦争を戦い、新政府に抵抗した罪によって身柄を静岡藩に預けられ、同地での禁錮を申し渡される。

その今井が放免となったのは、旧幕軍総裁の榎本武揚や同陸軍奉行の大鳥圭介と同じく、明治5年1月のことである。

この今井の2通の供述書が大正15(1926)年刊行の『坂本龍馬関係文書』で公表され、勝海舟の明治3年4月15日の日記にも「坂下(本)竜馬暗殺は佐々木唯三郎はじめとして、信郎(今井)などの輩、乱入と云う」¹⁴とあることなどから、以後、見廻組説が定説化されていくこととなる。

¹² 兵部省口書(明治3年2月)箱館降伏人 今井信郎 一部が日本史籍協会編『坂本龍馬関係文書 1』東京大学出版会 1988 pp. 452-454 <請求記号 GB391-E16>に掲載されている(引用箇所はp. 453)。

¹³ 刑部省口書 箱館降伏人 元京都見廻組 今井信郎 口上 一部が前掲(注12)『坂本龍馬関係文書 1』 pp. 456-458に掲載されている(引用箇所はp. 457)。

¹⁴ 『海舟日記』(東京都江戸東京博物館所蔵) 引用箇所の翻刻が東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編『勝

海舟関係資料海舟日記 4』東京都 2006 <請求記号 GK72-H77> p. 85に掲載されている。

¹⁵ 『坂本龍馬殺害者(今井信郎氏実歴談)』宮地佐一郎編集・解説『坂本龍馬全集』増補4訂版 光風社出版 1988 pp. 848-852 <請求記号 US21-E13>(引用箇所はp. 848)『甲斐新聞』で明治32年10月27日~11月1日の6回にわたり記者・結城礼一郎が今井の談話を連載し、それが岩田鶴城の手により『近畿評論』(17) 1900.5 pp. 22-27に掲載されたものである。

今井信郎の告白

ところが、明治33（1900）年になって今井信郎による「坂本龍馬と中岡慎太郎を斬ったのは、世間では近藤勇と土方歳三だと思って居ますし、歴史にもそうあれば其当時の人も大概そうだと
思っていました、実は私です」¹⁵との告白が発表された。

兵部省の供述書では今井は見張り役だったが、ここでは「最初、横鬢を一つたゝいて置いて、体をすくめる拍子、横に左の腹を斬って、それから踏み込んで右から又一つ腹を斬りました。此の二太刀で流石の坂本もウンと云って倒れて仕舞いましたから」¹⁶と、自分が龍馬を斬ったことを認めているのだ。

この告白から、今井を実行犯と認めるか否かは意見の分かれるところだが、これも見廻組説が定説化される根拠の一つとなっている。

また、今井は近江屋に向かった人数を、渡辺吉太郎・桂早之助と「外にもう一人、都合四人」¹⁷としているのだが、これは龍馬らがいた近江屋の2階に上がった直接の実行犯を指しているものと思われる。

この「ほかにもう一人」と名前を明らかにしていない人物について、「その一人は誰ですか」という問いに対して、今井は「それはまだ生きています。そしてその人が己の死ぬまでは決して



今井信郎（拙著『龍馬暗殺最後の謎』
新人物往来社 2009 p.185）

己の名を言うてくれるなど、くれぐれも頼みましたから今申上げることはできません」¹⁸と答えている。

ところが、ここに矛盾がある。

今井は供述書で、直接の実行犯を含めて自分以外の6人の名前をあげていた。

明治元（1868）年1月の鳥羽伏見戦に出陣した見廻組は、激戦のすえに33人が戦いの犠牲となった。

伏見の御香宮神社所に『戊辰東軍戦死者霊名簿』という、鳥羽伏見戦での旧幕軍側戦死者の名簿が保管されており、そこに見廻組の犠牲者の名前も記録されていた¹⁹。

今井以外の人物をピックアップしてみると、次

今井の談話が公表された経緯とその信憑性については、結城礼一郎著『旧幕新撰組の結城無二三 お前達のおぢい様』玄文社 1924 p. 66-72に記述がある。
<近代デジタルライブラリーでご覧になれます
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/983052/>>

¹⁶ 前掲（注15）『坂本龍馬殺害者（今井信郎氏実歴談）』『坂本龍馬全集』増補4訂版 p. 851

¹⁷ 前掲（注15）『坂本龍馬殺害者（今井信郎氏実歴談）』『坂本龍馬全集』増補4訂版 p. 850

¹⁸ 前掲（注15）『坂本龍馬殺害者（今井信郎氏実歴談）』『坂本龍馬全集』増補4訂版 p. 850

¹⁹ 「戊辰之役東軍伏見鳥羽淀八幡二於テ戦死及殉難者人名簿」（伏見 御香宮神社所蔵）翻刻が石田孝喜著『幕末維新京都史跡事典』新装版 新人物往来社 1997 <請求記号 GB8-G20> pp. 74-88に収録されている。

のようになる（諱^{いみな}と年齢は省略した）。

正月五日より同六日に至る 鳥羽、淀、橋本等に於て負傷後、同八日、紀伊国三井寺にて死す。骨は同山上墓地に葬る。

見廻組頭並頭取兼 佐々木只三郎
—中略—

正月三日より五日に至る鳥羽、淀、橋本等に於て負傷、戦死。遺骨は大坂山小橋寺町心眼寺に葬る。

見廻組肝煎 渡辺吉三（太）郎
同四日戦死。墓所同上。

同 桂 早之助
—中略—

同五日、鳥羽、淀、橋本に於て戦死す。墓地は大坂市心眼寺にあり。

同（見廻組伍長） 高橋安次郎
—中略—

同（同三日より五日に至る鳥羽、淀、八幡、橋本等に於て戦死）

同（見廻組並） 桜井太（大）三郎

同 同 土肥 沖（仲）蔵

6人全員の名前があった。6人ともに死亡していたのだ。今井がというような「まだ生きている人」など、いないではないか。

この事実から、彼らがダミーだった可能性が浮かびあがる。今井は供述するにあたって、実行者全員を鳥羽伏見戦での戦死者から選んだのではな

いだろうか。

指揮官である佐々木只三郎はずせないとして、正直に残る5人の名前を明かした結果、彼らに何らかの累が及ぶことを、今井は恐れたのだ。生きていれば、平穏に暮らしているかもしれない彼らを、獄に送ることはできない。そう考えた今井は、絶対に捕らえられることのない戦死者の名前を、あえて供述したのではないだろうか。

とすれば、佐々木と今井以外については、その信憑性は大きく揺らぐ。定説化された見廻組説であるが、その実行者についての定説化には至っていない。

渡辺篤の告白

見廻組に所属していた、渡辺篤という人物がいる。

この渡辺は明治44（1911）年に『渡辺家由緒^{マツ}歴代系図履^{マツ}暦書』（以下『渡辺家履^{マツ}暦書』と略称）という、自身の履^{マツ}歴書を著していた。公表を前提としたものではなく、子孫に伝えることを目的としたものである²⁰。

その文中で、渡辺は「見廻組頭取佐々木只三郎の命により自分始め組の者、今井信郎外三名申合せ、黄昏より龍馬の宿へ踏込」と、自分が実行犯の1人であったことを告白している²¹。

記述されたのが明治44年であることから、当初は同33年に発表された今井信郎の談話を参考として、自身の経歴を飾ろうとしたものかとも思われた。

20 「渡辺家由緒歴代系図履^{マツ}暦書」の存在が公表されたのは、昭和53年6月に放送されたNHKの「歴史への招待」である。近江屋事件に関する部分は『坂本龍馬全集』増補4訂版（前掲 注15 pp. 909-912）に収録されている。全文の翻刻が、瀬尾謙一「見廻組肝煎渡辺篤摘書」とし

て『鴨の流れ』（京都維新を語る会）（8）1980.9 pp. 1-18、（9）1981.9 pp. 1-30に掲載されている。〈請求記号 Z8-1671〉

21 前掲（注20）「渡辺家由緒歴代系図履^{マツ}暦書」『坂本龍馬全集』増補4訂版 p. 909

ところが、巻頭に執筆の動機として「この書、別に巻物に認め^{した}これあり候えども、認め洩れの廉々これあるに付き、改めて相記し候也」とあり、『渡辺家履曆書』以前に同種の「巻物」が存在していたことを述べている²²。つまり、その原本の改訂版として執筆されたものだったのだ。

原本の所在は不明だが、その一部が発表されたことがある²³。

同年十一月、(中略)頭佐々木只三郎ならびに拙者始外五名申合せ、夕京より右良馬旅宿へ急に踏み入り候ところ、五、六名慷慨の士居合わせ、軽く相戦い首尾よく悉く打果し候也。

この原本が執筆されたのは、明治13(1880)年6月のことである。今井信郎の談話の20年も前に、渡辺篤は実行犯の1人であったことを認めていたのだった。これによって『渡辺家履曆書』が今井談話を模したものではなかったことが明らかとなり、実行犯および実行グループの特定は新たな局面を迎えることとなる。

秘密の暴露

前述のように、近江屋の現場には何者かの刀の鞘が遺留されていた。

その持ち主について、今井信郎は「その晩、渡辺が(現場の)六畳へ鞘を置いて返(帰)って来ましたが……」²⁴と、佐々木只三郎らと2階へ上



渡辺篤(拙著『龍馬暗殺最後の謎』
新人物往来社 2009 p.225)

がった渡辺吉太郎としているが、『渡辺家履曆書』には「刀の鞘を(現場に)忘れ残し返(帰)りしは世良敏郎と云う人にて」とある²⁵。

この「世良敏郎」の存在は、今井のいう渡辺吉太郎を否定するものだが、あえて渡辺篤が「刀の鞘を忘れ残し返りしは……」と言及したのは、当然、今井談話を意識してのことである。

今井は正式な供述書であるため、実行グループ全員を死者とすることで、彼らに累が及ばないように配慮した。しかし、渡辺篤には『渡辺家履曆書』を公表するつもりはなかった。つまり、配慮は必要ではなかったのだ。だから、真実を書いた。「真犯人以外に知りえない秘密の暴露」を行ったのだ。

それは、自身が実行犯の1人であったという事実を裏付ける、決定的な証拠となるはずだった。

²² 前掲(注20)「渡辺家由緒代系図履曆書」『坂本龍馬全集』増補4訂版 p. 911

²³ 木村幸比古「坂本龍馬暗殺事件考」『歴史読本』昭和54年1月号 pp. 96-103 <請求記号 Z8-422> (引用箇所はp. 100)

²⁴ 前掲(注15)「坂本龍馬殺害者(今井信郎氏実歴談)」『坂本龍馬全集』増補4訂版 p. 852

²⁵ 前掲(注20)「渡辺家由緒代系図履曆書」『坂本龍馬全集』増補4訂版 p. 910

ところが、渡辺篤の思いに反して「世良敏郎」の名前がネックとなってしまう。

見廻組についての研究は未着手の状態、ある時期の在隊者を網羅した隊士名簿さえも見出されていない。そのため、世良敏郎の存在を確認することができなかったのだ。

存在を確認できない人物を、近江屋事件の実行者に加えることに抵抗感が生じるのも無理はない。それどころか、架空の人物の名前を出したのではないかと、『渡辺家履曆書』の記述そのものにも疑いが持たれてしまったのである。

しかし、世良敏郎という人物は実在していた。

万延元（1860）年の桑名藩の分限帳に「小林謙介」という名前がある。桑名藩の飛び地である越後の柏崎で寄合番をつとめていた人物だ。

この小林家の系図中に「世良敏郎」の名前があった。そこには「相続後世良敏郎」とある。

相続前の世良敏郎は小林甚七重幸といい、小林家系図には「慶応三（年）卯五月、家督鋤助へ譲り、公義（儀）京都詰見廻り組世良家相続改め敏郎」²⁶と記されている。小林甚七は慶応3年の5月に見廻組の世良家の養子となり、敏郎を名乗っていたのだ。

では、この養父となった世良とは誰か。

この問題も国立公文書館所蔵の多聞櫓文書²⁷によって明らかとなった。

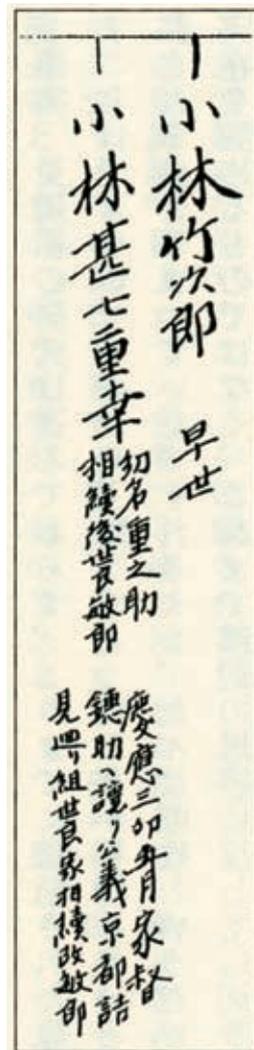
明治元年2月、鳥羽伏見戦後に江戸へ帰還した見廻役の岩田織部正が、世良敏郎を父親に代えて見廻組並に取り立てる旨の願書を旧幕府に提出し

ていたのだ。その文中に「右吉五郎儀、病氣にて御奉公相勤むべき体（に）御座なく候に付き、（中略）悴敏郎御抱え入れの儀、願ひ奉り候旨申し聞け候」とあり、養父の名前が世良吉五郎であったことも判明した。

願書の提出は2月だが、前年5月に養子となって実質的な相続は行われていたものの、10月の大政奉還、12月の王政復古、続く鳥羽伏見戦という時勢の変転により、願書の提出が大幅に遅れてしまったのだろう。

これによって世良敏郎の存在が判明し、『渡辺家履曆書』を裏付けることができた。まさに渡辺篤は「秘密の暴露」を行っていたのである。

願書の提出が2月ということは、世良敏郎が鳥羽伏見戦で戦死しなかったことを意味しており、渡辺篤とともに今井談話の「まだ生きている人」に該当する。つまり、今井の供述にあった佐々木只三郎を除く5人のうち、2人は生存者だったのだ。



小林家系図（拙著『龍馬暗殺完結篇』新人物往来社 2000 p.212）

26 拙著『龍馬暗殺最後の謎』新人物往来社 2009 <請求記号 GK124-J60> p. 232に写しを掲載している。

27 多聞櫓文書「世良吉五郎病氣二付見廻組並之者番代之儀申上候書付」（慶応4年2月）（国立公文書館所蔵）

やはり、今井の供述による実行者にはダミーが混入されていたのである。

今井信郎が描いた図式

現在となつては、実行グループの特定は困難だが、近江屋の2階に上がった直接の実行犯が、佐々木只三郎・今井信郎・渡辺篤・世良敏郎の4人であったとすることに問題はない。

今井の供述から定説化されていた実行犯は、今後はこの4人に訂正されるべきであろう。

では、なぜ今井は供述書では直接の実行犯を佐々木只三郎以外に、渡辺吉太郎・桂早之助・高橋安次郎の3人とし、階下の見張り役を土肥仲蔵と桜井大三郎としたのだろうか。

この割り振りに何らかの意図があったのだろうか。戦死者をダミーとする配慮を行った今井に、

ほかの意図はなかったのだろうか。

ここで先の『戊辰東軍戦死者霊名簿』を振り返ると、渡辺吉太郎・桂早之助・高橋安次郎の3人は、大坂の心眼寺に埋葬されたことが記録されている。3人とも兵部省の供述書で直接の実行犯とされた人物だ。

一方、見張り役とされた桜井大三郎と土肥仲蔵には死亡地・埋葬地が記録されていない。

現在でも渡辺吉太郎と桂早之助の墓碑は心眼寺の無縁塔にあり、高橋安次郎の墓碑もかつては存在していたことが、東京大学史料編纂所所蔵の写真によって確認できた（下写真）。この3人は間違いなく心眼寺に埋葬されていたのだった。

鳥羽伏見戦に出陣した見廻組は大坂に敗走し、心眼寺と周辺の寺院を宿舎とした。今井もその1人であり、渡辺・桂・高橋の最期をその目で確認し



高橋安二郎（写真左）と桂早之助（写真右）の墓碑（写真提供：東京大学史料編纂所）

た可能性は非常に高い。

対する桜井大三郎と土肥仲蔵についてだが、土肥の墓は和歌山県日高郡由良町の念興寺に現存している。負傷して大坂に送られたのち、和歌山まで運ばれたが、仲間の足手まといになることを恐れ、同寺の本堂で切腹したと伝わる。

また、桜井大三郎の死亡地についての記録はなかったが、拙著『京都見廻組史録』の発表後、見廻組に所属していた人物のご子孫より連絡をいただき、本人自筆の回顧録の複写を提供していただき幸運に恵まれた。

その人物は鳥羽伏見戦で負傷し、新選組の負傷者とともに富士山丸で東帰したのだが、富士山丸が由良に寄港した1月11日のこととして、「同夜、隊長佐々木只三郎及び同僚桜井大三郎の二名、療治のため同艦に来たる。数時間を経ずして死亡せり。艦長の指揮により砲丸を死体に結び付け水葬の式になせり」²⁸と、桜井ばかりか、和歌山の紀三井寺で死亡したとされる佐々木の最期について

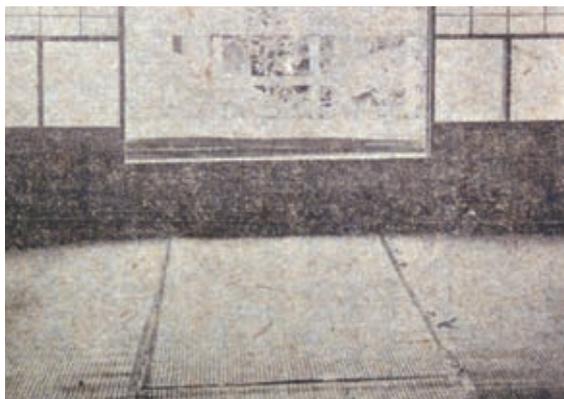
も言及していた。

桜井は佐々木とともに富士山丸の艦内で死亡し、由良沖で水葬にされていたのだ。

今井も和歌山経由で江戸に帰還したが、土肥や桜井とは同行してはいなかった。つまり、今井は渡辺・桂・高橋の最期を実見したが、土肥と桜井については死亡したとの知らせを受けていたとしても、その死を実見してはいなかったのだ。

近江屋の2階に上がった直接の実行犯を、今井は佐々木のほかに渡辺・桂・高橋とし、見張り役を土肥・桜井としていた。今井の割り振りには、最期を実見した人物と、間接的にでしか知りえなかった人物と、同じダミーでありながらも、その割り振りにまで繊細な気配りを行っていたのである。

(きくち あきら)



近江屋の内部（『大阪時事新報』明治42年2月9日「隠れたる豪傑 今井信郎翁（6）」＜マイクロフィルム請求記号 YB-273＞）

菊地 明氏 プロフィール

幕末史研究家。日本大学芸術学部卒業。編著書に『京都守護職日誌』（全5巻）、『会津藩戊辰戦争日誌』（上・下）、『新選組全史』（全3巻）、『土方歳三、沖田総司全書簡集』、『沖田総司伝私記』、『新選組十番組長 原田左之助』、『真説 岡田以蔵』ほか。



²⁸ 原本に表題はないが、ご子孫による表題は『鳥羽伏見の敗戦回顧』である。

フランス共和国 上院議員団の訪問



アスリーヌ議員（右）と長尾館長

9月21日、ダヴィッド・アスリーヌ上院議員（上院仏日友好議員連盟会長、文化委員会副委員長）を団長とする訪日フランス共和国上院議員団が、国立国会図書館を訪問した。一行は6名で、参議院の招待により訪日したものである。

議員団は、蔵書のデジタル化や電子図書館サービスを中心に長尾真館長との懇談を行った。文字に書かれた文化遺産をデジタル化し、後世に伝える国立図書館の役割等について、意見交換がなされた。アスリーヌ議員は、書籍のデジタル化がすべての図書館にとって課題となっている現在、日本の取組みは先進的であり、フランス議会の審議でも参考としたいと述べた。

その後、議員団は館内を見学し、古典籍資料のデジタル化作業や法令議会資料の書庫を視察した。

国際政策セミナー 「中国の対外戦略と 日中関係」



10月8日、東京本館で標記セミナーを開催し、約200名の参加があった。このセミナーは、調査及び立法考査局が行っている総合調査「世界の中の中国」プロジェクトの一環として、中国から金燦栄氏（中国人民大学国際関係学院副院長）を招へいして行ったものである。

金燦栄氏は「これからの10年の世界と中国——国際政治の視点から」と題する基調講演で、国際的な観点から中国の現状を紹介した。

引き続き、高木誠一郎氏（青山学院大学国際政治経済学部教授、当館客員調査員）をコーディネーターとし、津上俊哉氏（東亜キャピタル株式会社代表取締役社長）、高原明生氏（東京大学大学院法学政治学研究科教授）、鎌田文彦（調査及び立法考査局外交防衛調査室主幹）を交えたパネルディスカッションが行われた。

会場からは、日中交流の在り方、日本の対中国外交、中国の軍事力拡大などをめぐり多数の質問があった。

国際政策セミナーの記録は、総合調査の成果と合わせ、平成22年度末に『調査資料』として刊行する予定である。



お知らせ

■ 年末年始の ご利用について

○年末年始の休館期間

次の期間は、休館いたします。

東京本館・関西館

平成22年12月28日（火）～平成23年1月4日（火）

国際子ども図書館

平成22年12月27日（月）～平成23年1月4日（火）

*2階の資料室は、12月26日（日）から休室します。書庫の資料もご利用になれません。

○NDL-OPAC

NDL-OPACからの資料検索、複写申込みは年末年始の休館期間中も可能です（複写製品の発送は1月5日以降になります）。

○来館申込みによる後日複写

平成22年の最終開館日までに複写製品の受取りを希望される場合は、下の表に示した日までにお申し込みください。ただし、複写の分量が多い場合にはさらに時間をいただくことがありますので、お早めにご来館ください。

| 複写の種類 | 東京本館 | 関西館 | 国際子ども図書館 |
|--------------------|----------|-----------|----------|
| 電子式複写 | 12/22（水） | 12/22（水） | 12/18（土） |
| マイクロフィッシュからの引伸印画 | 12/22（水） | 12/22（水） | 12/18（土） |
| マイクロフィルムからの引伸印画 | 12/22（水） | 12/22（水） | 12/18（土） |
| フィルムからフィルムへのプリント | 12/22（水） | 12/20（月）* | 12/17（金） |
| フィッシュからフィッシュへのプリント | 12/22（水） | 12/20（月）* | 12/17（金） |
| 撮影によるネガフィルムの作製 | 12/22（水） | 12/20（月）* | 12/17（金） |
| 撮影からの引伸印画 | 12/18（土） | 12/16（木）* | 12/14（火） |
| 撮影からのポジフィルム作製 | 12/18（土） | 12/16（木）* | 12/14（火） |

*受取方法は郵送のみです。期日までの受付分が年内の発送となります。

お知らせ

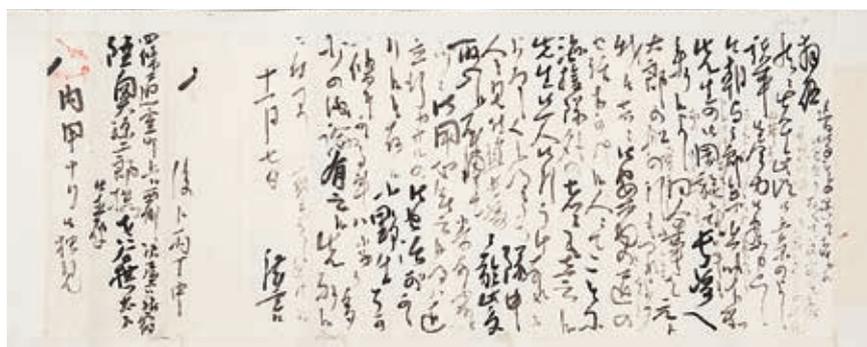
■ 関西館企画展示 「明治立憲制への あゆみ一名士の筆跡 をたどって」

関西館では、幕末・維新时期から明治前半期にかけて近代的な政治体制が模索されていく過程をたどる展示「明治立憲制へのあゆみ一名士の筆跡をたどって」を開催します。

国立国会図書館は、日本の近現代政治史にかかわるユニークなコレクションを所蔵しています。東京本館憲政資料室の所蔵する貴重な史料から、坂本龍馬、岩倉具視、木戸孝允、伊藤博文ら日本の近代国家形成に大きな役割を果たした人物の自筆書翰と「民撰議員設立建白書」の草稿などの史料11点を展示します。また、関連する図書などもあわせてご紹介します。

名士たちの筆跡をたどりながら、立憲制という新しい政治体制を模索した人々の活動の一端を振り返ってみませんか。

- 開催期間 12月16日（木）～12月25日（土）（日曜・祝日を除く）
- 開催時間 10:00～18:00
- 場 所 関西館 1階会議室
- 入 場 無 料



坂本龍馬書翰 陸奥宗光宛 慶応3（1867）年11月7日 <請求記号 陸奥宗光関係文書 51-13>
憲政資料室所蔵

お知らせ

■ 「本の万華鏡」第5回 「ようこそ、空へ —日本人の初飛行 から世界一周まで—」



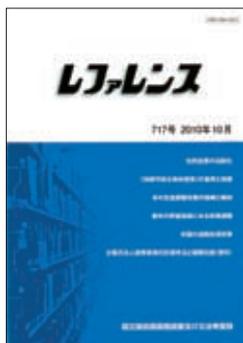
1910年初飛行を行ったアンリ・ファルマン式飛行機（第1章から）
所沢航空資料調査収集する会編
『雄飛 空の幕あけ所沢』
須澤一男 2005年
<請求記号 YQ5-H53> p. 31

1910年12月19日、日本人による動力飛行が国内で初めて成功してから今年で100年になります。10月27日から提供を開始した「本の万華鏡」第5回では、「航空100年」にちなみ、飛行機が日本の空を初めて飛んだ明治時代から記録ラッシュに沸いた昭和初期までを、3章に分けて取り上げています。

第1章では、日本人による国内初の動力飛行や国産機の初飛行など、第2章では、航空産業の発展と、数々の記録が樹立され、世界一周が成し遂げられた1939年までのトピック、第3章では、飛行機が世間の話題となり人々を熱狂させた様子を、文学作品や当時の新聞記事などを交えてご紹介します。空に果敢に挑んでいった先人達の情熱と、時代の躍動感をどうぞご覧ください。

○URL <http://nnavi.ndl.go.jp/kaleido/>

■ 新刊案内 国立国会図書館の 編集・刊行物



レファレンス 717号 A4 126頁 月刊 1,050円 発売 日本図書館協会

- ・住民投票の法制化
- ・「持続可能な森林経営」の基準と指標
- ・米の生産調整政策の経緯と動向
- ・都市の評価指標にみる政策課題
- ・米国の道路財源政策
- ・企業の法人税等負担の計測手法と国際比較（資料）

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03 (3523) 0812

595（2010年10月）号の訂正とお詫び
17ページ 左 下から2行目（誤）降下 →（正）降嫁

CONTENTS

- 02 Book of the month - from NDL collections
Sekai tempuku kidan
A strange story that the world overturns
- 04 Focus : 120th anniversary of the establishment of the Diet
- 04 Exhibition on Parliamentary Government Commemorating the 120th Anniversary of the Establishment of the Diet
- 14 Digital exhibition “Modern Japan in Archives”
Political History from the Opening of the Country to Post-war
- 18 Discover the history of the Imperial Diet
Database System for the Minutes of the Imperial Diet
- 26 Current theories on the assassination of Sakamoto Ryoma
- 22 <Tidbits of information on NDL>
60 years with the Diet (Japanese Parliament) :
Monthly publication “*The Reference*”
- 23 <Books not commercially available>
○ *Ehagaki no naka no Tosa : Utsuroiyuku toki no kioku : tenji kaisetsu zuroku*
○ *Kokuho doguten : Bunkacho kaigaiten Daiei Hakubutsukan kikoku kinen*
○ *Furikake no sekai*
- 37 <NDL News>
○ Senators of the French Republic visited the NDL
○ International Policy Seminar “China’s Global Strategy and Japan-China Relations”
- 38 <Announcements>
○ Library services at the year-end and New Year
○ Exhibition in the Kansai-kan “Toward the Meiji Constitutional System: Seen through the Handwritten Works of Prominent Figures”
○ Kaleidoscope of Books (5) “Welcome to the sky”
○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成22年11月号 (No.596)

平成22年11月20日発行 定価525円
(本体500円)

発行所 国立国会図書館
編集責任者 山田敏之
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03(3581)2331(代表)
FAX 03(3597)5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

発売 社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812(販売)
FAX 03(3523)0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜ずして転載される場合には、事前に当館総務部総務課に連絡してください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >「刊行物」>「国立国会図書館月報」でご覧いただけます。



「国会議員双六」外袋 部分
東京 国会議員双六発行所 明治25（1892）年
23×16 cm（本体61×46 cm）
<請求記号 憲政資料室収集文書 1238 >
電子展示会「史料にみる日本の近代」で全体をご覧になれます
http://www.ndl.go.jp/modern/img_r/048/048-001r.html

国立国会図書館月報

平成22年11月20日発行（毎月1回20日発行）
（11月号通巻596号）

発売：社団法人 日本図書館協会 定価 525 円（本体 500 円）